お姉ちゃん、それなに？

えんどう豆TW

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

古明地こいしが煙草を吸うお話。旅をする短編集にするつもりです。

書いてる途中にこいしちゃんのシスコンが爆発してしまいました。

目次

古明地こいし、煙草に出会う ―― 1
ご飯は出来立てが一番美味しい ―― 6
貴女の姿は氷に映る ―― 10
お姉ちゃん、翼を授かる ―― 13
こいしちゃん、濡れ衣で怒られる ―― 16
悪人かどうかは笑顔を見ればわかる ―― 19
温泉回！　前編 ―― 24
温泉回！　後編 ―― 26
侵略者Ｔ ―― 32
魔法の森のアリス ―― 38
タイトル『サブタレイニアンローズ』 ―― 41
マジカル☆大図書館 ―― 44
重い女は可愛い ―― 48
青春の河原とオムライス ―― 51
過保護な放任 ―― 55
移ろい行く先は ―― 59
不器用お姉ちゃんズ ―― 62
霊夢とこいしの本当になんでもない一日 ―― 65
ハイエース・外来人 ―― 68
霧雨魔理沙は笑わない ―― 72
金髪の子かわいそう ―― 75
妹ーーーーク ―― 79
宇佐見菫子の悪夢 ―― 82
こいしちゃんのちょっとイイトコ見てみたい ―― 86

小話：不幸なサトリ妖怪 ―― 90
宇佐見菫子とコミュ障ＫＹお姉ちゃん ―― 92
宇佐見菫子はまだ悪夢を見る ―― 97
クリスマスｉｎ地霊殿 ―― 102
３歩歩いて２歩逸れる ―― 105
猫問答 ―― 108
お地蔵さんのお友達 ―― 110
私をＣＢに連れていって ―― 114
後悔先に立たず、後から全速力で追いかけてくる者 ―― 116
出番が欲しいこいしちゃん ―― 119
やりすぎ幻想郷 ―― 121
線対称ガール ―― 125
宇佐美■子の独白 ―― 128
ギャン泣く子も黙る鬼の大将 ―― 132
１０１３ ―― 137

古明地こいし、煙草に出会う

私の姉、古明地さとりは地底を統べる大妖怪だ。旧地獄の管理を閻魔様から任せられ、日々書類仕事に明け暮れている。・・・いや、全然大妖怪とかじゃない、普通の妖怪だけどなぜかそんな仕事を押し付けられている。もともと暇があっても読書に勤しむ引き篭もりだけどね。

とはいえ重大な仕事なのは間違いないらしく、私が家に帰って構ってよアピールしても仕事仕事と相手にしてくれない。・・・あれ？もしかして仕事を理由に避けられてたりしない？しないよね？私達ほど仲のいい姉妹なんていないし、私はお姉ちゃんのことを愛してるし、お姉ちゃんも私のことをきっと愛してるし、相思相愛だよね？ていうか私たちこんなに仲がいいのに一回も――（ここから先は閲覧禁止です）。

まあそれは置いといて、とにかくお姉ちゃんは私に構ってくれない。くれないんだけど・・・最近、部屋がとても煙くさい。そして私は見てしまったのだ、お姉ちゃんの口から、口から・・・口から煙が!!!!

「なにこれ!?お姉ちゃんの魂が室内に溢れかえってる!!集め・・・吸い込まなきゃ!!スゥー!スゥー!」

「アンタ何してんのよ・・・」

「これ間接キス!?ていうか直接キス!?これキス!?」

「キスじゃないわよ。ていうか帰って来て早々何をやってるの？」

おっと、お姉ちゃんの魂に夢中でお姉ちゃん本体に気が付かなかった。

「ただいまお姉ちゃん！」

「おかえり。で、奇行はいつものことだけれど今回はかなりキマってるわね。いいことあった？」

「うんあった！お姉ちゃんの魂がこの部屋に充満してるからキスしてるの！」

「だからキスじゃないわよ。あとこれはお姉ちゃんの魂じゃないから

ね」
「え!?じゃあこれなに?あ、もしかして悪霊!?どうしよう、私吸い込んじゃった!」
「悪霊でもないわよ。これは煙草の煙・・・ああ、こいしは煙草って知ってる?」
「知らない!」
「これよこれ」
　そういってお姉ちゃんは左手に持った白い棒をくいくいと動かした。
「それなに?」
「煙草」
「うんそれはわかったから。あのねお姉ちゃん、私いつも思うんだけどお姉ちゃん人の心がわかる割に人が伝えたいことを何も理解しないよね。今のそれなに?は明らかにその白い棒の名称じゃなくてその用途を訊いてるの、お空でもわかると思うんだけど。ねえそこんところどうなの?」
「・・・申し訳ありません」
「はいよろしい。で、その煙草ってのは何?」
「うーん、なんていえばいいかな・・・。説明だけするなら煙を出して吸い込むものなんだけど・・・」
「へぇ、煙?なんのために?」
「吸ってると落ち着くのよね。ストレスが和らぐというかなんというか」
「あーそれで書類仕事でイライラしてるお姉ちゃんは中毒者になってるわけね」
　私の言葉に気まずそうなジト目をするお姉ちゃん。
「なんで中毒って知ってるのよ・・・」
「そんな魔法のお薬みたいなものがあれば皆ハマるじゃん。大方最近幻想郷に流れてきたものを買ったんでしょうね、スキマのおばさんか誰かが入荷元じゃない?それでハマったお姉ちゃんは見事に収入源となってしまった」

「・・・あんた昔から頭は無茶苦茶キレるわよね。ホントもったいない・・・いや、今のは忘れて」
「・・・？どうしたの？」
「なんでもないわ。とにかくご推察の通りよ、人間にとっては有毒らしいけど妖怪の私にゃ知ったこっちゃないってね。御覧の通りゴミ箱と灰皿が消費量に追い付かなくなっちゃったわ」
　そういってお姉ちゃんは部屋の隅の惨状を指さした。水の入ったバケツが４つ、空の箱が詰まったゴミ箱が６つ、そして積みあがった段ボールが・・・めんどくさくなっちゃった。そこら辺に落ちてるライターも相まって生活レベルは最低記録を更新している。
「ふーん。お姉ちゃんがそんなに夢中になるものなんだ・・・」
「なに？アンタもほしいの？ストレスなんてなさそうな生活してると思ってたけど」
「興味があるだけですぅ～。フンだ、悪かったわね～ストレスフリーでバカみたいな生活してて！」
「そこまで言ってないわよ。・・・アンタ変わったわね」
「なんて？」
「なんにも。別にいいわよ、アンタも妖怪だから害はないだろうし」
　途中お姉ちゃんがボソッと何か言ったみたいだけど聞こえなかった。聞き直す前にお姉ちゃんは段ボールの中から小さい箱を取り出して開けた。箱の中にはお姉ちゃんが手に持っている煙草がぎっしりと詰まっていた。その中から一本を取り出し、私に手渡す。
「どうするの？これ」
「こっち側を口にくわえて。そう、そのままじっとしてて」
　するとお姉ちゃんはライターの火をつけ私が加えた煙草の先端に火をつけた。危ない危ない危ないっていうか顔近い。やばいやばいドキドキする待って待って待ってててか火も近い危ない危ない危ない。
「早く吸わないと火が消えるわよ。火がついてる状態じゃないと煙は吸い込めないから。ただし勢いよく吸い込んではダメ、むせるわよ。そう、上手ね。口の中の煙は・・・まああんまり美味しくないからやめときなさい、人間が吸い込んだらまずいらしいけどね」

お姉ちゃんの言葉を聞きながらゆっくりと煙を吐き出す。なんだか不思議な気分。晴れやかとか心地よいとかそんな感じはしないけど悪い気はしない。そう、例えるなら・・・虚無、これは虚無だ。無の境地に近い、私ん性質が余計にそうさせるのかもしれない。
「おーい、こいしー？聞こえてるー？何ボーっとしてんのよ。おーい？」
「・・・ああ、ごめん。なんかいいねこれ」
「そうね・・・ってアンタそれ！」
「？」
「いや、そうじゃなくて、目・・・いいえ、やっぱりなんでもない。それより何か、いつもと違うなんか、ない？こう・・・ああもう、じれったい！やっぱりいうわ。アンタ、目が開いてるわよ」
「やだなぁお姉ちゃん、私が寝てるように見えるの？」
「そうじゃなくてそっちの目！第三の目のほう！」
言われてみれば、お姉ちゃんの考えてることが何となくわかる。ちらりと自分の脇に目をやると久しく目を開けた青色の球体が見えた。そう、私とお姉ちゃんはサトリ妖怪だから相手の考えていることがわかるのだ。尤も私は嫌になって自ら瞳を閉ざしたが、何故か今は開いているらしい。そして前はあれほど嫌がっていた読心能力も気にならない。すごいじゃん煙草。
「なんだか懐かしいね。まだ表面くらいしか読み取れないけど。あはは、お姉ちゃんすっごく驚いてる」
「当然でしょ！なんで・・・？いやそれよりもアンタ、大丈夫なの？」
「あんまり気にならないや。私もこの煙草気にいっちゃった。少し分けて？」
「・・・いいわよ」
「あはは、もしかして私がもう一回瞳を開くきっかけになると思ってるんでしょ。でも多分無理よ、だってもう取り返しがつかないんだもの。意味を失くして新しい妖怪に近い存在になっちゃった私だもの、戻れないよ。でも限定的に前に戻れるのかな？」
「・・・」

「自分がいつもやってることをやられると複雑なんでしょ。うふふ、これに懲りたらもう少しそのヤな性格を治すことね」
「・・・アンタも昔はこんな性格だったわね。でも懐かしいわ、昔は隠し事なんてできなかったもの、嫌みも言いあって二人で生きてきた」
「今もしてないでしょ、私は。でもお姉ちゃんは私に気を使って誤魔化すことが多くなった。なんにも気にしてないのにね」
「ばーか、私が気にするのよ」
　懐かしい。何もかもが懐かしい。悪い気はしないし、なんならちょっと後悔してしまったほどだ。でもやっぱり――――。
「ほぁぁぁぁ！なんかすごいねコレ！疑似的に古明地こいしになれる薬？みたいな？確かになんにも気にならなくなるし鎮痛剤みたい！」
「そんな高等なものじゃないでしょうね。まあ気に入ったのなら持ってくといいわ。くさるほどあるしね、しばらくはなくならないでしょう・・・多分」
　そういって何箱かお姉ちゃんは箱を手渡してくれた。
「ありがとー！」
「どういたしまして。・・・ま、ほどほどにね」
「私のセリフだよ！」
　久しぶりに笑った気がした。

ご飯は出来立てが一番美味しい

街を歩く。地底の街は地上と比べても栄えていると言える。一日中、年がら年中賑わっているこの街はとにかく利用者が多い。そのため昼も夜も関係なく大勢の妖怪によってこの繁栄がもたらされている。地底に住むほぼ全ての妖怪がこの街にいるといっても過言ではないほどだ。

「ん～・・・お腹すいたなぁ」

私は空腹だった。贅沢な話だけど、この街には店が多すぎる。多すぎるが故に店選びにとても悩まされる。これでも地底の支配者（今でも疑わしいくらい）である古明地の妖怪なのでお金に困っているということはない。よく遊びに来ているから私の顔を知っている妖怪も多いので、勧誘もよくある。

「お、こいしちゃん！お昼ご飯かい？」

「うん、でも決めかねてるんだ～」

「そりゃあ丁度いい！今朝とても質のいい鶏を仕入れたんだ、どうだい？」

「鶏、鶏かぁ～・・・メニューは？」

「お好みで。唐揚げでも丸焼きでも好きなのを選びな！こいしちゃんが来てくれるならすぐにでも出せるぜ！」

こんな風に。そして迷ってる時の勧誘ほど効果のあるものもなく、断る理由もない私はその店に入ることにした。

「じゃあ丸焼きで！」

「あいよー！おい平八、こいしちゃんに今朝の上玉丸焼きで出してやんな！」

平八、と呼ばれた店員からの返事が奥の方から帰ってきた。

調理場の前に設けられた席に座る。お姉ちゃんの小説にカウンター、と書いてあったのを覚えている（最初に聞いた時、私の頭の中で低く構えた男が相手の拳を躱しながら相手の顔面にストレートを叩き込んだ）。目の前で炎に晒されている鶏肉は、素人目からもわかるほど脂がのっていて美味しそうだった。

「しかしこいしちゃん、久しぶりじゃねぇか。2，3週ぶりかい？」

「あはは、覚えてないや。ふらふら～っと出かけちゃうからね」

「この間さとりの奴がウチに来てお前さんが尋ねてきたか聞いてきたぜ。ついでに飯もって言うから珍しいこともあるもんだと思っていたが、ちゃんと家には帰ったのかい？」

「うん、地底に帰ったらまず家に帰るもの」

数ある店の中でもここは私がよく行く店でもある、しばらく地上にいたから心配したお姉ちゃんが来たのかもしれない。しかし普段外に出ないお姉ちゃんが訪ねてくるなんて、耳を疑う話だった。愛されてるな～私。

「なら良いんだ。さとりはこいしちゃんと違って少食なの忘れてたよ、ついつい大盛りで出しちまった」

「私が大食いみたいな言い方しないでよ！お姉ちゃんが少食なのはその通りだけど～」

「なっはっは！鶏の丸焼きを一人で食っちまう女の子はなかなかいないぜ！」

「む～・・・注文取りやめにしよっかなー」

「おおっと、別に悪く言うつもりは微塵もねぇよ。いっぱい食うことはいいことだ！妖怪っつっても飯と酒は美味いに限るだろ？」

不機嫌そうな顔をする私に軽い調子で流す店主。本来妖怪は人間を食べれば（妖怪次第だが）何年も生きることができる。だけどせっかく美味しいと感じることができるのだから、無機質な食事をするのも損だもの。

「でも、お姉ちゃんのことあんまり避けないんだね」

「そりゃあ頭ん中覗かれるのは気味がわりぃが、別に客を騙そうってわけでもねぇからな。隠し事がない奴もそういねぇが、鬼は嘘を嫌う

もんだろ」
　この店主は鬼の妖怪だった。地底では珍しいことでもない、そこら中に鬼が歩いている。そんな鬼でもあまりお姉ちゃんに近づこうとしない。何も優しくしようとしているわけではなく、何人も区別せずに一人の客として見るこの店主の姿勢が私は好きだ。
「ヘイお待ち！サービスで煮物も付けとくぜ！」
「・・・本当にこの量を女の子が食べると思ってる？」
「こいしちゃんは食べるだろ？」
「食べるけど！」
　私の女の子としてのプライドは空腹の前に為すすべも無く敗北した。

「んん～！美味しい！」
「へへ、そうだろ？美味そうに飯を食う顔、良いじゃねぇか」
「そんなに幸せそうな顔してた？」
「おうともよ、俺が言うんだから間違いねぇ」
　心の目を閉じた時、失われたものがごく僅かで良かったと思う。私の変化に敏感なお姉ちゃんはひどく心配したけれど、それでも根本的に何か変わることがなかったのが救いだ。悟り妖怪が同じように目を閉じても、私のように無事で済むとは限らない。
　そんなことも美味しいご飯の前ではどうでもよくなるくらい、この瞬間は確かに幸せだと言えた。どれくらいで食べきったか、私の前に用意された料理は跡形もなく消え去った。
「ふ～、ご馳走さま」
「あいよ。しっかしその小さい体のどこにこんなに入るんだか」
「やっぱり多いんじゃない！」
　食べ終えた私は、満腹を落ち着けて次はどこへ行こうか考えていた。しかしその前に、
「ちょっと一服」

「ん、なんだいそりゃあ。楊枝の代わりにしちゃあ太すぎねえか？」
「煙草って言うんだって。葉巻みたいなものってお姉ちゃんが言ってた」
「へぇ～・・・しかしこいしちゃんも意外に溜め込むタイプなのかい？」
「え？なにが？」
「鬱憤とか」
「別に？でもこの煙草、私はとっても気に入ったの」
　そういえばお姉ちゃんは仕事のストレスで煙草に溺れてたっけ。その話をすると流石の店主も苦笑いだった。
「程々にしとけよ。物が心の拠り所になるのはあんま良くねえ」
「お姉ちゃんはもう手遅れみたいだけど」
「そん時はこいしちゃんが止めてやりな」
　煙を吐き出して、一息。私が顔を向けると店主は少し驚いたように目を丸くした。随分と大人びて見えるもんだな、だって。
「任せてよ」
「しっかし随分と大人びて見えるもんだな」
「ふふふふ、そうでしょ？私の魅力に今更気づいた？」
「まさか、とっくの昔に気づいてるぜ」
「子供っぽいところがでしょ。悪かったね～」
「おお、さとりみてぇなことも出来んだな」
　煙草の煙よりも、この店の空気が私には心地よかった。

「って、あの店主さん言ってたよ。お姉ちゃん」
「わかってるわよ!!わかってるけどそれだけでやめられたら苦労しないの!!!」
　後日、書類の山の前に半泣きになっているお姉ちゃんに伝えてあげた。

貴女の姿は氷に映る

地上と地底は昔不可侵条約を結んでいたという話がある。昔というにはあまりにも最近だけれど、地上と地底はそれぞれ行き来が許されていなかった。私はそんなことお構いなしに地上に出かけたりしていたけど、言ってしまえば建前みたいなものだったと思ってる。それぞれを守るための口約束、それが不可侵条約。

「あ、こいしじゃん！」

「貴女はチルノちゃん！」

妖精は私の姿が見えるらしい。というより一度見られたら割と認識されやすいし、子供なんかは初めてでも私の姿が見える。妖精の場合は後者に該当するってお姉ちゃんが言ってた。

「久しぶり？」

「うん、家に帰ってた」

チルノは妖精の中でも結構強い方で、弾幕ごっこも他の妖怪とタメをはれるほど。普通は妖精なんて妖怪にかなうもんじゃない。ただまあ、一言でいえばバカっぽい。

「一人なんて珍しいね、何してるの？」

「んー？んー・・・釣り？」

「なんで疑問形なの・・・」

仲間と一緒に騒いでいるイメージの強いチルノだけど、意外な一面が見れたのかも。しかし釣り、釣りねぇ・・・。

「なんか釣れるの？」

「いいや、全然」

「じゃあなんで？」

「やることないしー」

ふーん、と生返事を返して横に座る。しばらくして私が煙草を取り出して火をつけるとチルノが興味を示した。

「けほっ。なにそれ？」

「煙草」

「あー・・・なるほどね」

ちょっと驚いた。チルノは煙草を知ってたんだ。
「いや、初めて見たけど。あれでしょ？煙の出る・・・名前忘れちゃったけどなんか気持ちいいやつ」
「とっても語弊のある言い方だけど、間違ってはないね」
気持ちよくなる煙って、麻薬みたいな言い方をする。でもお姉ちゃんの様子を見ているとちょっと否定しづらい・・・。
「興味ある？」
「ない。ニコチンの妖精になりたくないし」
ニコ・・・？
「それに入ってる中毒性成分のこと」
「貴女ほんとにチルノ？」
なんか頭いいキャラになってない？誰だこれ。
「なんか、こいしといると一人でいるときみたいに落ち着く」
「褒められてるのか貶されてるのかわからないわねそれ」
「どっちでもないよ」
もしかして元々こんなキャラなの？みんなといるときは無理してたりするのかな。
「こいしも結構こんな感じだよ」
「私が？まっさかー」
「本当。まあテンション高い時もあるけど、基本的には飄々としてる」
「私チルノのことバカだと思ってたから飄々なんて言葉知ってると思わなかった」
「奇遇ね、あたいもこいしはあんまり頭良くないんだと思ってたよ」
お互いにお互いを下に見るとても醜い関係だったようだ。まあ大体の人はそんなもんだろうし、特に気にすることもない。
「でもなんていうか、本当に新鮮」
「あたいもこいしがそんなにストレス溜めてると思わなかったよ」
「いや別に？気に入っただけ」
「なんだ」
短い会話を交わしながらちらりと竿の方に目をやった。獲物は現れない。

「そもそも氷の張った湖に魚なんているのかしら」
「いるときもあるよ、ワカサギとか」
「あー・・・ああ」
一瞬人魚の姿が脳裏に浮かぶ。小魚の方ね、まさか人型を釣ろうと思ってるわけないよね。
「普段も釣りしてるの？」
「うん、誰とも遊ばないときはよくやってる」
せいぜいカエル釣りが限度だと思ってたけど、案外経験者だったらしい。
その後しばらく他愛もない会話をして別れることにした。チルノの釣り竿に獲物がかかることはついになかった。
「あたいもここまでにしようかな」
「残念、ボウズでしたー。次は獲物がかかるといいね」
チルノは私に手を振ると森の奥へと飛んで行った。私も日が傾いてきたのを見ながら適当な寝床を探そうと歩き出し、ふと先ほどの湖を見る。
湖には一面に貼られた氷と、チルノが釣りをするために開けた穴だけ。かすかに残る太陽の光は、氷に鏡のように映った私の姿を照らしていた。

翌日。昨日の湖から少し離れたところで野宿を済ませた私は、森の方が騒がしかったので少し除いていくことにした。
「キャハハ、またリグルの負けー！」
「くそー！もう一回だチルノ！」
虫の妖怪、宵闇の妖怪、チルノともう一人緑髪の妖精。無邪気に遊ぶ彼女たちと同じように、チルノもまた昨日みせた落ち着きなどなかったかのようにはしゃいでいた。

お姉ちゃん、翼を授かる

家に帰ると、書類の山に埋もれるお姉ちゃんの姿が…と思っていた私は驚いた。そこにあったのは仕事に押し潰された姉の姿ではなく、かってない速度で書類を裁く仕事できるウーマンだった。

「あら、お帰りこいし。あと少しで終わるから待ってて」

いつもは書類が溜まっているはずの机の左側はスカスカで、代わりに机の右側に処理の終わった書類の山が積まれていた。お空（ペットの名前だ）がせっせと処理の終わった書類をダンボールに入れていく。

「ど、どうしちゃったの・・・」

あまりの出来事に愕然とするしかない私は、結局お姉ちゃんの仕事が終わるまで立ち尽くしていた。

「今回の外出は短かったわね」

「う、うん。特に理由はないけどね」

特に理由もなく外出して特に理由もなく留まり飽きたら帰る、それが私の地上探索だった。

「どうしたの？」

「いや、さっき別人のように仕事をしてたから遂に煙草で頭がおかしくなったんじゃないかと・・・」

「私をなんだと思ってるのよ…。まあ、それはいいとして」

お姉ちゃんは得意げな顔になり口角を上げて私に衝撃の事実を告げる。

「私のかってない仕事ぶりに驚愕したようね？ふふふ、聞いて驚きなさい。私はね・・・・・・翼を授かったのよ!!!」

メディーーーック!!!やっぱりお姉ちゃんは頭がおかしくなってしまっていた！

「お姉ちゃん！病院いこ！まだ間に合うから！」

「失礼な！まだギリギリ健康診断も引っかかってないわよ！」

「ギリギリなんだ!?ていうか体じゃなくて頭の病院だよ！」

「もっと失礼だけど!?」
　ギャーギャーと騒がしい部屋に入ってきたお燐（これもペットの名前）が苦笑いで私に言う。
「私も最初に見たとき遂に頭がおかしくなったかと思いましたが、大丈夫ですよ。なんでも栄養ドリンクを買ったんだとか」
　栄養ドリンク。改めてお姉ちゃんに顔を向けると、お姉ちゃんは頷いて私に一本の缶を見せた。その缶は青と銀のメタリックな色をしていた。文字は・・・読めない、英語って奴だろう。フランが書いてくれた手紙に似ている（あれは後日送り返して読めない旨を伝えた）。
「この飲み物の名前は＊＊＊＊＊。使用者の集中力を極限まで高め、仕事の効率を最大まで上げる叡智の結晶よ」
「こわ・・・」
　なんか、聞いてると恐ろしい飲み物に聞こえる。名前はれ・・・なんだか発音できない。
「ふふ、仕事をしない貴女にはわからないでしょうけど、これはとても素晴らしい飲み物なのよ。こうして仕事後に倒れずに貴女と話せているのもこれのおかげなんだから」
「そ、そうなんだ。あはは・・・」
　苦笑いしかできない。煙草の時は欲しいと思ったがこれは絶対に飲みたくない。
「お燐、そろそろご飯の支度をお願いしてもいいかしら？」
「はい、メニューはこちらで決めますね」
　お燐が部屋から出て行く。お姉ちゃんの目はまだまだギラギラと輝いておりいつもの眠そうな瞳は何処へやらといった様子だ。
「で、翼ってのは？」
「まるで翼を授かったかのように体が軽いのよ。いつもの気だるさもない、これを毎日飲めば私は永遠に元気でいられるってことね」
「そんな美味しい話があるのかな・・・」
　私は終始疑いの目を向けていたが、お姉ちゃんはこれを素晴らしい飲み物と言って聞かなかった。

「さて、仕事も終えたしご飯の前にお風呂を済ませましょうかね」
「洗いっこ!?洗いっこする!?やーん、お姉ちゃんのエッチ！」
「アホか、姉妹でしょうが私たちは」
お姉ちゃんと一緒にお風呂に入れるなんて（私が勝手に出て行くから）滅多にない！そんな数少ないチャンスにテンションが上がらないわけがないということだ。舞い上がる私の頭を叩いて抑えるお姉ちゃんに、そういえばとさっき聞きたかったことを思い出して尋ねる。
「その飲み物、何本飲んだの？」
「さあ？覚えてないけど2箱は空になったわね」
英語の書かれた空の段ボールが2つ転がっていた。

お風呂と食事を終え部屋に戻ってきた私たちに・・・いや、お姉ちゃんに電撃が走る。膝をつき顔を青くして口元を抑えるお姉ちゃんに駆け寄る。
「お姉ちゃん!?どうしたの!?」
「頭痛がするわ、は・・・吐き気もよ・・・。くっ・・・ぐぅ、な・・・なんてことなの・・・この古明地さとりが気分が悪いだなんて・・・」
相当重症のようで本気で病院に連れて行くことを考えるが、原因がわかってしまったので背中をさすりながらお姉ちゃんに告げる。
「代償のない力なんてないんだよお姉ちゃん。あれは栄養ドリンクじゃない、ただの元気の前借りね」
「うっぐぅぅ・・・」
結局その日はお姉ちゃんが気を失うまで私が看病する羽目になった。

こいしちゃん、濡れ衣で怒られる

地上を散歩していると目の前にいきなりおばさんが現れた。その名も隙間おばさん、胡散臭さと神出鬼没さで有名。
「とてつもなく失礼なことを考えてないかしら」
「いや全然」
悪びれずに答えるとおばさんはため息を一つ。ていうか何で出てきたの？
「貴女、というよりは貴女のお姉さんが来るのを待ってたんだけどね。恐ろしいくらいに出てこないからどうしたものかと困っていたのよ」
「で、そこに私が来たから伝えてもらおうって？」
「ええ、まあ黒猫の方でもよかったけどあの子は警戒心が強いからねぇ」
お燐ではなく私が先に見つかったというだけだった。なんて不幸なのかしら。
「んで、用事って？まさか借金抱えてたりする？」
「むしろその逆よ。あの阿呆がやってる〝副業〟が結構やばいことになってるから控えさせたいのよ」
「副業ぅ？」
初めて聞いたそんな話。お姉ちゃんならどや顔で成功自慢をしそうなものだけど、どうやらそういうものではないらしい。
「あー・・・あまり外にこの話を持ち出さないでね？と言っても貴女には無駄か」
「失礼な。私にだって分別はあります、ただ口が滑っちゃうだけ」
「その軽い口のどこに分別があるのかしらね」
正直どうでもいい、というのが今のところである。話のネタが尽きると喋っちゃうかもね。
「はぁ・・・まあいいわ。簡単に言えば投資ね、ただしこの投資は何もさとりだけがやってるわけじゃない。紅魔館も天狗どもも多くの妖怪はこの投資に参加してるわ」

「わかった。人里でしょ」
「正解。不可侵条約があったころは彼女も参加していなかったのだけれどねぇ」
　ところがどっこいそうもいかぬ、おばさんが言うには不可侵条約が解除されてからしばらく経った日のこと、どこからか聞きつけたのか人里を（裏で）巡る経済戦争にお姉ちゃんも参加。見る見るうちにお姉ちゃんの下（つまり息のかかった）者が人里の中でのし上がっていったとか。
「これすなわち権力争いともいえる。甘く見ていたわけじゃないけれど、ここまでとはね」
「お姉ちゃん、お金が絡むと本当に抜け目がないからねぇ」
　私のお姉ちゃん好き好きポイントの一つだ。ちなみに金のためなら与り知らぬどこの誰が犠牲になろうと全く心の痛まないクズでもある。
「そうなのよね。調停者たる私は参加していないのだけれど、流石にこれは見過ごせない。パワーバランスが崩れかねないのよね」
「つまりは脅しね」
「そうともいう。でも放っておく選択肢はないわ、貴女を人質にとってもね」
「それは無理。私が本気を出せば文字通り誰も捕まえられない」
　ぴりぴりしてきた。このシーンはきっと大層絵になることでしょう。先に空気を壊したのはおばさんの方だった、
「かもね。それにあまり手荒な真似はしたくないの、姉君のためと思ってここはひとつ伝言係になってくれないかしら？」
「うん、いいよ。でも、何でも知ってるおばさんって聞いてたけど、案外そうでもないのね」
「全知全能じゃないのよ」
　少しバカにするような態度をとっても大人の余裕と言ったところか、にこやかに笑って済ませようとするおばさん。しかしその態度はすぐに崩れた。
「って、おばさん!?今おばさんって言った!?」

「やべっ」
その瞬間、私は全力で逃げた。能力をフル稼働させた私を捉えられる者はいない。どやぁ・・・。
「お、覚えてなさいよ・・・」
おばさんの恨み言は空に消えていった。

「ってわけで、お姉ちゃんへの恨み言を私に全部押し付けられちゃった」
「そう」
先日散々無理をして仕事を片付けたせいか、ここ最近は悠々自適な生活をしているらしいお姉ちゃん。やってらんないと煙草を吹かす私を横目にどうでもよさげに呟いた・
「しかしここまでハマるとは。私より吸ってるんじゃない？」
「さっきお燐が大量の箱を捨てに行くところを見たよ」
「なんのことかしらね」
中毒者は決まって自分のことになると認めたがらないものだとつくづく思う。
「でもほんとにほどほどにしてよねー。私の肩身が狭くなるじゃない」
「そんなこと言われてもねぇ」
紅茶を口にしてからニヤリと口角を吊り上げるお姉ちゃん。
「そんなにうまくいってるなんて、存じ上げなかったわ」
地底の引き篭もりが知るわけないでしょう？そんなことを言いたげな顔は私が知る中で最も意地の悪い、大嘘吐きの最低な笑顔だった。

悪人かどうかは笑顔を見ればわかる

妖怪の私が神社にいる、という珍妙な光景は幻想郷では珍しいことではない。もちろん聖なる力的なものには多少なりとも弱いけれど、そんなちんけなもので消滅するほど力の弱い妖怪でもない。

「お掃除終わり～っと！」

私の目の前で落ち葉を掃き捨てていた神社の巫女が嬉しそうにこちらに走ってくる。目出度い色の巫女も人気だが、この頭の愉快な巫女も私は嫌いじゃない。

「なんですか？なんかとても失礼なことを考えてません？」

「なんでみんなそう言うのかな。私よりよっぽどサトリ妖怪の適正あるんじゃない？」

「そりゃそんな生暖かい目で見られてたら誰でも気づきますよ」

先日のおばさんのことを思い出す。あれはもう少し特殊な部類だったりするのかもしれない。

「それで、今日はどういったご用件で？」

「暇だったから」

「・・・じゃああっちの暇神社にでも行けばいいじゃないですか」

「遠いじゃない」

巫女はまともに取り合う気がないと思ったのか、ため息を一つついて私の横に腰かけた。

「私は忙しいんですけどね～」

「落ち葉を弄る以外に何かあったの？」

「掃除ですけど！まあ別に予定があるわけでもないですけど！」

急に不機嫌になられるとびっくりするじゃない。

「そりゃあ、予定のない女なんて言われたら誰だって怒りますよ。あーあ、素敵な殿方との出会いでもないかなー」

「人里行けばいいんじゃない？逆ナン逆ナン」

「私は清楚で可憐な乙女なんですぅ～、そんなはしたない真似なんてしませんよ」

「へぇ～姦しい女が清楚で可憐な、ねぇ」
「悪口が過ぎませんか？泣きそうなんですけど」
　口が悪いのは姉譲りだから許してほしい。私は悪くないし育った環境が悪い。
「あー・・・まぁ、あの人は確かに」
「でしょ？ドブ川を煮詰めた方がマシなほど性格の悪いお姉ちゃんを見て育った私が可哀想」
「およそ自分の姉を表しているとは思えない言葉ですよね」
　事実だもの。勘違いしないでほしいけど、私はお姉ちゃんが嫌いな訳じゃない。むしろ大好き。
「で、ソレもさとりさんから貰ったものですか？」
「うん、とっても気に入ってるんだ」
「体に悪いですよ～って言っても辞めないんですよねぇみんな、そもそも妖怪に健康とかそんな概念があるのかは知りませんが」
「無いんじゃない？まあ精神面の影響は少なからずありそうだけどね」
　実を言うと煙草を始めてから無意識の抑制がよくできている。なんでかは知らないけど、私の目が開いたりしたのと関係があるのかも。
「外の世界にいた頃は男子なんかがこっそりトイレで吸ってるのを先生に見つかって怒られたりしてましたね。懐かしいなぁ」
「外の世界ではダメなんだ」
「ダメというか、２０歳までは吸っちゃダメだったんですよ」
　じゃあ私は良いんだね、というと巫女は曖昧な笑顔を浮かべた。
「その見た目で吸ってたら間違いなく捕まりますけどね」
「何百年生きてると思ってんのさ」
「でも外見は１０歳にも満たないように見えますけどね」
　ちんちくりんで悪かったね。
「そういう意味じゃないですよ」
「まあでも、物が心の拠り所になるのは良くないって聞いたよ」
「そうですよ！やはり心の拠り所は神にあるべし！この機会にこいし

さんも守谷神社に――――」
「あーはいはい！その話はまた今度！」
危うく宗教勧誘の嵐に遭うところだった。くわばらくわばら。
と、そこに一陣の風。目の前に黒い翼を持った少女が降りてくる。
「あ、ブン屋だ」
「あやや、こいしさんですか。なかなかお目にかかれない人に出会えましたね」
「取材ＮＧよ？お姉ちゃんにならしてもいいけど」
「ご冗談を。前回返り討ちに遭いましたからね・・・」
お姉ちゃんと口で勝負するほど愚かなこともない。読心能力に加えてあの性格の悪さだ、普通の感性を持った人なら即座にノックアウト。
「取材の代わりに、今月号の新聞をどうぞ」
「代わりにって何よ。あ、でもお姉ちゃんが新聞のこと褒めてたよ」
「は!?ど、ど、どのように!?」
「『新聞紙ほど便利で使いやすい紙はない』ってさ」
「・・・そんなことだろうと思いましたけどね」
上げて落とされる天狗少女。この落胆ぶりを見るためにわざわざ話を持ち出したのだから、私もお姉ちゃんと同類だったりする。
「それで、今日は何の用ですか？」
「おっと、忘れることでした。実は――――」
それから、ここ最近妖怪の山で起きたちょっとした事件の調査が始まった。正直興味がなかったので、欠伸ついでにもう一本と思ったところで箱が空になっているのに気づく。
「あー・・・また貰って来なきゃなぁ」
独言る。誰も聞こえはしないだろうに。
「私はご飯の用意をしてきますね。こいしさんもよかったら食べてい

きますか？」
「ううん、今日は家に帰るから」
「そうですか。それではまた」
　巫女が神社の奥へと消えていくのを見終わると、茜色の空に目を向ける。綺麗だなぁなんて呑気な感想を抱いているといつの間にか隣に小さな影が座っていた。
「や、元気だったかい？」
「蛙の神様だ」
「・・・いや違うけど、まあいいや」
　何か用だろうか？と不思議そうな目を向けているのがわかったのだろうか、私の心を読んだかのように首を横に振った。
「別に、夕飯までの暇つぶしさ」
「私そろそろ帰るけど」
「さっき聞いてたよ。ぼーっとしてたから横に座っただけさ」
　そっか。それっきり黙っていると独り言の様に神様は口を開いた。
「心の拠り所ってのはさ、本来自分にあるべきなんだ。物でもなければ、神でもない、最後に助けてくれるのは神様じゃなくて自分だけだからね」
「神様がそれを言うの？」
「神様だから言うのさ。神は人を助けない、ただ見てるだけの薄情な存在だからね」
　説得力があるなぁ。貴女だから余計に。
「失礼な、これでも温情な方だよ」
「えー、そう？貴女からはお姉ちゃんと似たような匂いがする」
　私がそう言うと神様は少し驚いたように目を見開き、意地悪そうな顔でキシシシと笑った。お姉ちゃんが人を馬鹿にする時の笑顔と重なる。
「あれには敵わんさ。そういえば聞いたよ、随分とがっぽり稼いで八雲からお咎めを食らったらしいじゃないか」
「私は全然知らないんだけどね。どうせ別の方法でやるに決まってるよ」

「だろうね。狡猾というかがめついというか」
きっとお姉ちゃんが聞いたらさぞ悪い顔で言うだろう。「神様に褒めていただけるなんて、とてもとても光栄ですわ」って。
「ま、良いんだけどねー。こいしちゃんも吸いすぎには気をつけなよ。その毒は体を蝕むものじゃない、心を侵すものだ」
「忠告ありがとう。お姉ちゃんにもよく言っておくよ」
「ああ、そうしてくれ」
茜色の空がいつのまにか薄暗くなってきた。神様は影に溶けるようにその場から姿を消してしまった。

温泉回！　前編

地上に人気の露天風呂付き温泉があるらしい。その噂を聞いた私は早速部屋で読書をしているお姉ちゃんに話を持ちかけた。
「温泉、行きたくない？」
「別に」
うんうん、予想通りだ。基本的に外に出たがらない引きこもり気質のお姉ちゃんはまずこの話に乗らないだろう。次の作戦。
「えー！行きたい行きたい行きたい行きたい～～～～!!!」
必殺、駄々をこねる。見るに耐えない幼稚な私の姿を（なんか自分で言ってて悲しくなってきた）無視できまい。しかしそんな私の思惑は崩れる。
「じゃあ行ってきたら？」
「お姉ちゃんと行きたいの～～～～!!!」
乙女の心がわからんとはこのこと。女としては間違いなく終わってるお姉ちゃんを無理やり引っ張って行くことも考える。
しかし当然抵抗されるのは目に見えてるし私ではお姉ちゃんに勝てない、そういうことだ。
「お燐とお空は私たち二人で出かけても大丈夫って言ってたよ？」
「外堀を埋める手腕は素晴らしいけれど、私を引っ張り出す能動的な動機に欠ける。却下ね」
「お姉ちゃんが能動的に外出することなんてないじゃない」
「その通りよ」
ここまで人が頼み込んでるのに全て自分の天秤で物事を判断するクズっぷりに涙が出てくる。普段なら他人に見せるこの顔が大好きなのだけれど、今回は妹であるこの私が相手だ。古明地の名にかけて諦めるわけにはいかない。
「・・・本当はね、久しぶりに二人きりでゆっくりしたいなって思ったの。いつも私は自分でも知らないうちに出かけちゃって、どっか知らないとこにいて、まるでお姉ちゃんから離れてるみたいで。だけど、

最近は自分でも制御できてるし・・・今のうちにやりたいことをやりたいなって」
「・・・」
俯いているから今どんな顔でお姉ちゃんが私を見ているのかはわからない。
「でも、ごめんね。いつまで経っても私はお姉ちゃんに迷惑かけてばっかりだね。別にいいんだ、一人で行きたいわけじゃないし。この話は忘れて」
顔を上げると、心底困ったような顔のお姉ちゃんがため息をついて口を開いた。
「はあ・・・わかったわよ。行きましょう、その温泉とやらに」
「本当!?本当に!?やったーお姉ちゃん大好き！」
基本的に口上では負けなしのお姉ちゃんにも弱点がある！それはずばり、家族には甘々なところだ!!
「本当に調子が良いんだから・・・」
「やったー！お姉ちゃんと温泉、どうしようワクワクしてきたー！何泊する？１０？２０？」
「バカ、限度があるでしょう」
「はーい！」
私の涙がちょちょぎれるほどの演技に敗北したお姉ちゃんはこうして温泉の約束を取り付けられたのだった。
「人の心の弱みに付け込むなんて、いったい誰に似たのかしらね」
「目の前に元凶がいると思いますけど？」
「それもそうか」
普段人のために心を痛めるような人じゃないから忘れてたのかな？
「でも、お姉ちゃんと行きたかったのは本当。一人で行ったって意味ないよ」
そういうと、お姉ちゃんは普段は見せない笑顔を私に向けてくれた。

温泉回！　後編

そんなわけでお姉ちゃんと地上に来ている。二人で地上に行くのは地帯の異変の後に宴会に参加した時くらいだから・・・いいや、数えるのめんどくさい。別にどうでもいいしね。
「あ、お姉ちゃんに煙草のおかわりもらうの忘れてた」
「は？もう使い切ったの？」
「うん。ちなみにため息はなしだからね？私の何十倍の速度で吸ってると思ってるの？」
「・・・私は仕事が忙しいからセーフなのよ」
さいですか。もちろん絵面的にも精神的にも余裕でアウトだけどね。
「しかし他の客と当たるのが嫌だからってまさか貸切にするとはね」
「これくらい安いもんよ。ゆっくりしに来たんだから他人と一緒に入るなんて絶対に嫌。それにせっかくこいしと二人きりだからね」
「お姉ちゃん・・・」
なんていい姉なのだろう。
「私と二人きりで誰にも見られずにあんなことやこんなことしたいなんて・・・」
「アホか。ていうか体をクネクネさせるな気持ち悪いわね」
「や～ん、そんなまだ温泉に着いてないのにぃ」
「叩いたのよ！いつもに増してテンションがおかしいわね」
そりゃそうよ。こんなチャンス滅多にないんだから楽しみで楽しみで仕方ないというもんです。
「たまには姉妹二人でしっぽりとってのも悪くないと思うよ？」
「そんな含みのある擬音を使われてもね」

「着いた～！」
私がはしゃいでいるとお姉ちゃんはすでに受付で手続きをしていた。うーん、この温度差。いや逆にお姉ちゃんが私みたいに走り回っ

ているところは全く想像できないけど。
「部屋に荷物を置きに行くわよ。温泉はその後」
「はーい！」
「そっちは脱衣所」
「はぁい」
　半ば引き摺られる形で部屋に連れて行かれる。二人分だというのにとてつもなく広い部屋をとったらしい。『どうせ私達だけなのだから広い部屋取ればいいじゃない』と言っていたけど無駄を嫌うお姉ちゃんにしては珍しいことだ。
「本当に広いね。これ宴会用とかじゃないの？」
「かもね。まあ机は片付けさせたし布団は敷いてあるし、気に入らなかったら好きに動かせばいいじゃない」
「いや、別に気に入らないわけじゃないけど」
　と、そうだ温泉温泉。ここに来た一番の目的なんだし、早く入りたい。
「少し早いと思うけど・・・まあ、好きにするといいわ」
「お姉ちゃんも行くに決まってるでしょ。ほらいくよー」
「わかったから猫みたいに首根っこを掴んで引きずるのだけはやめてほしいわね」
　先ほど来た道を通って大浴場へ。廊下ですれ違った従業員の後ろから尻尾が飛び出しているのを見つけた。
「そうじゃなければ私達が来れないわよ」
　それもそうか。

　脱衣所で着替えを終えたら即露天風呂。岩に囲まれた大きなお風呂と上から眺める幻想郷の景色はもう最高だ。
「ふあぁぁぁ・・・」
　リラックスしきった私は思わず間の抜けた声を出してしまった。まあ聞かれてもお姉ちゃんだけだしいいや。
「ふぅ・・・」

私に続いてお姉ちゃんも入浴する。妹よりも発育の悲しい体が湯船を揺らす。
「え、なんでタオル巻いてるの？」
「別にいいじゃない、温泉だとこうしたくなるのよ」
「えー。ぐへへ、いいじゃねえかよ姉ちゃん、ちょっとくらいよぉ～」
「確かに私は貴女の姉ちゃんだけど、こんな下品な笑みを浮かべる妹だとは思いたくないわね」
下品な笑みとか言われると流石に少し傷つく。どんな笑顔もこのこいしちゃんにかかればキュート１００％だと思いますけどね。
「そんなおっさんみたいなセリフを吐きながらどの口が言うか。まぁどうせこんなことだろうと思ったけど」
「それは私がおっさんだと言いたいの？それとも私がセクハラ変態野郎だと言いたいの？」
「どうでしょうね」
ふん、どっちでもないもん。
それからしばらく言葉もなく、ぼーっと景色を眺めたりしながら温泉を満喫した。心地いい空間だ。静かで透き通っていて、でも寂しくない。
「お酒、持って来ればよかったなぁ」
「持って来させることもできると思うけど」
「んー・・・それはいいかな」
「そう」
それきり、また会話がなくなった。案外というか、もっとうるさくお姉ちゃんと喋ってるもんだと思ってたけど意外と大人しくしている、とまるで外から自分を見ているような感想を抱いた。
お姉ちゃんも同じようで、最初の方は私の方を何度か見て落ち着かない風だった。それも精々３回程度で、そのあとは虚空を見つめていたけれど。
「ねえお姉ちゃん」
「なに？」
「呼んだだけ」

「そう」
　また会話がなくなる。
「ねえお姉ちゃん」
「なに？」
「呼んだだけ」
「そう」
　会話がなくなる。
「ねえお姉ちゃん」
「なに？」
「何回まで無視する？」
「別に。呼ばれたら応えるわ」
「なんで？」
「無視する理由がないから」
　優しいね、と呟くと不思議そうにこちらを見た。お姉ちゃんからすればそれは優しさでもなんでもないだろうけど、一般的に見れば妹のだる絡みにずっと付き合ってくれる姉は優しいのだろう。
「ふふ、大好きだよ」
「・・・？私もよ」
　知ってる。

　部屋に戻った私達は食事を済ませ布団の上で寛いでいた。正確には寛いでいたのはお姉ちゃんだけで、私は準備をしていた。なんの準備かって？そんなの決まってる。
　私は手に持っている枕をお姉ちゃん目掛けて思い切りぶん投げた。私の準備を見ていたお姉ちゃんは、急に投げた枕をその場から飛び退いて躱した。
「枕投げしよ！」
「投げてから言うな」
　だって不意打ちじゃないと当たらないじゃん。でも幻想郷の少女

としてこの弾幕ごっこ・・・もとい枕投げは負けるわけにはいかない。
「もちろん拒否権はないよ。私が投げる側だからね！」
「投げる側ってなに？これ一方的に私が避け続けるの？」
「もちろん」
　枕投げって何か知ってる？と言いたそうなお姉ちゃんの顔目掛けてシュゥゥウト！超エキサイティング！残念ながらこれも避けられたけど。
「まだまだいくよー！スペルカード『ご先祖様の総立ちした枕』！」
「とても呪いが強そうな枕ね」
　まあ大量に投げてるだけなんだけどね。お泊まりと言ったらやっぱり枕投げ、これはこの世の定めだ。
「やっぱり大きい部屋にして正解ね」
　お姉ちゃんが小さく呟いた。

　一頻り遊び終わった私達は二つ隣り合わせに敷いた布団の上で寝転んでいる。これは・・・
「ここからは大人の時間ね？」
「就寝時間よ」
　あれ？そういう雰囲気だと思ったのに。
「どこがよ。一体いつからこんなピンク色の脳みそになったのかしら」
「脳みその色はみんなピンクだと思うけど」
「物理的な話じゃなくてね」
　逆にお姉ちゃんはこんなに可愛い私を見てもなにも思わないの？
「姉妹だからね」
「姉妹なのに？」
「ダメだ、常識にズレがある」
　姉妹ってそういうことしないの？じゃあ私は今までまずいことをしてきたのかな。

「待って。まずいことってなに?貴女は私の知らないところで私に何かしたの?」
「うふふ」
「答えて」
　お姉ちゃんは私の心が読めないから黙っておこう。お姉ちゃんのこういう反応が見られるのも私だけだ。
「はあ・・・もう、早く寝るわよ」
「はーい」
　考えることを放棄したのか、投げやり気味に私を寝かしつけようとする。電気が消え、暗闇の中で私もまた目を閉じる。楽しい時間はあっという間に過ぎてしまうのが、とても残念だった。

侵略者T

その悪夢は、私の部屋から始まった。
「お姉ちゃん、朝だよー」
「ん・・・おはよう、こい――――」
おはよう、こいし。そう言いかけた私の口は開いたまま言葉を紡ぐことができなくなった。
「どうしたの？お姉ちゃん」
こいしが不思議そうに見つめてくる。しかし違和感がある。こいしが今着ているのは狂ったようにフリルだらけの私服ではない、とてもシンプルな白いTシャツ。そしてその真ん中にでかでかと筆文字で

――――『湯豆腐』

見間違いか？疲れてるのかな私。その筆文字の左下に小さく鍋のイラストが描いてある。一目で鍋とわかるほど特徴を捉えたいい絵なのが腹立たしい。
「おーい、起きてる？目開けながら寝てる？」
どうする？この場合の正しい判断を私は知らない。さりとてこのファッションの差によって出来た明確な溝を埋める術も持ち合わせていない。その結果私は――――。
「いいえ、なんでもないわ。おはよう、こいし」
見なかったことにした。なんかの間違いだ、そもそもこいしが急に変なことをするのは今に始まったことじゃない。ここは華麗にスルー、飽きるまで待つのが一番良い行動だ。
「お燐が朝ごはん作って待ってるよー」
「あら、早起きだったのね。すぐに食堂に向かいましょうか」
どうせ明日には飽きている。そう高を括る私をよそに上機嫌にスキップをしながら私の少し前を行くこいし。
「お燐！お姉ちゃん呼んできたよー！」

「ああ、ありがとうございますこいし様。しかしさとり様がお寝坊なんて珍しいですね」
「ごめんなさいお燐。すぐに朝食に――――」
　こいしに続いて食堂に入る。お燐に謝りながら椅子に座ろうとしたその時、私は見てしまった。お燐が着ているのはいつもの黒地の服ではなく真っ白なTシャツ。台所に向かっているため正面からは見えない。
　まさか、まさかそんなはずはない。しかし料理を作り終えてこちらを向いたお燐のシャツの正面には
――――『マグロ漁船』
　なんでマグロ漁船なの!?しかも例のごとくイラスト付きで!?確かにお燐の好物は魚、それも赤身の魚だ。マグロももちろん大好物だが、当然海のない幻想郷は魚を入手する手段が乏しい。そのためマグロはなかなか手に入らないわけだが・・・。
「どうかしましたか?さとり様」
　どうかしてるのは貴女の頭ではないの?と言い出しそうな自分の口を閉じる。マグロ漁船に同行してまでマグロが食べたかったのだろうか。しかし私は当然、
「いいえ、なんでもないわ。いただきましょうか」
　見なかったことにした。下手に触れるのは得策ではない。
　そうだ、もしやこいしとお燐は共犯で私を驚かそうとしているのではないだろうか。そんなドッキリがサトリ妖怪の私に通じるはずもない。その企み、暴かせてもらうわ!
「今日はポテトサラダと鳥ササミの燻製、豆腐の味噌汁です」
「おいしそー!」
「ふふ、おかわりもありますよ」
　しかしお燐からは特にいつもと違う思考は感じ取れない。さもこのTシャツを着ているのが当たり前かのようだ。
「いただきまーす」
「いただきます」
「い、いただきます」

悟られるな、この疑心を。サトリ妖怪の私が悟られるなどあってはならない。まさか地霊殿全体がこんなことになっているのでは・・・。私の嫌な予感はよく当たる。

食事を終えた私は部屋に戻らずに地霊殿を歩いて回った。流石に人型になれない子は変なTシャツを着ていないが・・・。

「あ、さとり様だー！」

この声はお空。お空は私のペットの中でも力を持っていて、人型にもなれる。そして私の手伝いをよくしてくれるいい子だが・・・。

「あれ？おーい、さとり様ー！」

振り返るのが怖い。この古明地さとりが怯えているというの？いいえ、そんなことないわ。ペットを信頼せずして何が飼い主か！

「あ、やっとこっち向いた！おはようございます、さとり様」

――――『鶏が先か、卵が先か』

なんかすごい難しそうなこと書いてあるー!?しかもイラストでは卵から親が産まれちゃってるよ！どう見ても鶏が先って主張してるじゃない！

「おはよう、お空」

しかし私の突っ込みを悟られてはいけない。お燐と同じくお空も特にいつもと変わらない、ということは私が不審な挙動をすると怪しまれてしまうということだ。

そして難なくお空と別れる。怪しまれることはなかった。しかしこのままではまずい、特にあれと同じものを着せられるのだけは御免だ。今日だけは地霊殿から離れておきましょうか。

誰にも気づかれないよう、そっと地霊殿を出る。とりあえず街に出よう。時間を潰すにはあそこが最適だ。と、その途中で例の橋を渡らなければならないことに気づいた。一抹の不安が私の頭をよぎる。

あ、遠目からでもわかる。あの子まあまあ人と違う格好してたもん。でもホラ見て、白いTシャツ着てる。あっち向いてるけど私には結末が見えるわ。

「あら、地霊殿の主ともあろうお方が優雅に散歩？妬ましいわね」

振り返った彼女、水橋パルスィのTシャツに書かれていた文字は
――『人類みな平等』
いやちょっと重い！貴女のキャラにそのセリフは重いセリフになりかねない！ていうかイラストないの!?まあないわねそりゃね！
「私の顔に何かついてる？じっと見つめて、その綺麗な瞳を見せつけようっていうの？妬ましいわね」
貴女の瞳も綺麗よ。いつもならそう言えるのに『人類みな平等』を見た後だと言いづらい。もはや切実な訴えに見えてきた。
「今日は街の方に用事があるのよ。貴女もどう？」
「嫌よ」
例によって心の中に変化はなし。これはもう異変だ、謎の侵略者によってこの地底が支配されつつある。私しかいない、私がこの異変を解決するしかない。
「よう、さとり。ここまで来るのは珍しいねぇ」
街で最初に会ったのは星熊勇儀。相当力のある鬼で、この地底の鬼のリーダーだ。いつも白いTシャツのような服を着ているが、今回に限っては
――『暴力』
似合いすぎー!!この違和感のなさがむしろ笑えてくる。しかしここで笑おうものなら終わりだ、侵略者に気づかれてしまう。私は必至の無表情でその場をやり過ごす。
「お、さとりじゃん。なんかあったのかい？」
次にあったのは黒谷ヤマメ。土蜘蛛の妖怪でいつもは黒をベースに独特なファッションをしているが、今日に限っては当然白のTシャツで
――『健康第一』
いや貴女がそれを言うの!?病を操る能力を持つ貴女と正反対の言葉だけど!?心の中では激しく突っ込みを入れながらも表ではポーカーフェイス。今年のナンバーワン女優は間違いなく私だ。
道行く妖怪誰を見ても白のTシャツと謎の一言。誰も疑わない、決して疑わない、もはや地底もこれまでなのか？いやまだだ、早く侵略

者を見つけ出してこの現状を変えるしかない。
走る、走る、走る。地底の街を走る。どれだけ走っても道行く妖怪は白Tばかり。幸いにも私はまだ侵略者に気づかれていない。寝ていたからか？そんなことはどうでもいい、一刻も早く――――。
「・・・？」
そこで更なる違和感に気づく。なぜ私だけ？そもそもあのファッションが当たり前なのにどうして私は誰にも気づかれなかった？誰も私に服のことを聞かない。彼女たちからすれば私の方が異端であるはずなのに。
「ま、まさか・・・」
恐る恐る、今日一度も確認しなかった自分の服み目を落とそうとする。あまりにも恐ろしい結論から目を逸らしたかった。だが一度考えたらもう止めることはできない。いつもより、走りやすかったその服は。
「う、うわあああああああ!!」
し・・・白T・・・ッ！これはいつものフリルのついた服じゃあないッ！最初から着ていたんだッ！自分では気づかないうちに、すでに私はヤツらの掌の上だったッ！いつだ・・・いつ着せられたッ!?すでに起きた時から着せられてたって言うのかッ!?
――――『道化師』
ピエロの絵が描かれたそのTシャツを前に、私はがくりと膝から崩れ落ちた。

「――――はっ!?」
ガバッと起き上がる。ここは・・・ベッドの上？地霊殿にある、私の部屋？そして、いつもの寝巻き。つまりあれは、夢だったと言うことだ。

「・・・はぁ」
珍しく目覚めが悪い。時計を見ると針は５の数字を指している。随分と早起きになってしまった。
「あれ？お姉ちゃん？」
物音が聞こえたのか、私の部屋の前から声がした。こいし？この時間に起きているなんて・・・。
「こいし？こんな時間にどうしたの？」
「頼んでたものが届いたから起きてきたんだー」
頼んでいたもの？何が何だかわからない、とりあえず部屋を出て部屋の前にいるであろうこいしに会うべきだ。
「うわ、すごい顔してる。変な夢でも見た？」
「まあそんなところね。ところで届いたものって？」
私がそう聞くと、こいしは笑顔で「これだよ」と足元の段ボールから何かを取り出す。
それは、折りたたまれた白いＴシャツだった。

魔法の森のアリス

瘴気が濃い。妖怪の私にとっては害がないけど、人間が入ろうものならたちまち気分が悪くなり奥に行けば行くほど三途の川が見えてくる。そんなこの場所は魔法の森と呼ばれている。

当然そんな場所だから好き好んで行くわけでもないのだけれど、私の体はそんなこと御構い無しにふらふらと行きたいところに行く。それは目的があるわけではなく、無意識に、気分で、そして気づいたらそこにいることが多かった。

今では自分の気分に従っているだけで特に気がついたら、とかそんなことはない。ただなんとなくこの森に立ち寄っただけ。それでもこの森に住む物好きだっている。

「あら?貴女は・・・」

綺麗な容姿。整いすぎてまるで人形みたい、と思うくらい完成された外見。金髪ショートで瞳が輝く魔法少女のアリスちゃんと出会った。

「アリスちゃんって・・・まあいいけれど、魔法少女という言い方には何か別の意図を感じるわね」

そんなことないよ。でも魔法少女ってなんか可愛いじゃない。魔法少女アリス☆マジか、みたいな。

「なんじゃそりゃ。マジか、なら私より魔理沙の方が使ってそうじゃない」

確かにアリスは女の子っぽい喋り方をする。同じ魔法使いの魔理沙は結構男勝りというか、語尾が『~ぜ』だったりする。一人称は私なのにね。

「別に気にならんけどね。人の喋り方をいちいち気にするような性格じゃないわ」

そうでござったか。いやぁこれは失敬、失礼いたしましたってやつですな。

「いやそれは気になる。ところでなんでこんな辺鄙な場所まで来たの

？」
　んにゃ、目的も特になく散歩をしてただけだよ。気分屋なもので。
「そうは言ってもこんなところまで来るかな。いや責めてるわけではないのたけれどね？こういうところに来る者はそれ相応の目的があるから会ったらこうやって確認するようにしてるのよ」
　そうなんだ。でもごめんね、本当に散歩なんだ。だいたいポジション的にお嬢様な立ち位置の私にこんな辺鄙なところまでお使いをしに来る用事は降りかかって来ないと思う。
「ふーん、まぁそれならそれでいいわ。私は・・・私も人のこと言えないわね、散歩だから」
　つまり暇なのね。ね、せっかくだからお話ししようよ。
「いいけど、さっきからしてるじゃない」
　このまま『それじゃあ』って別れる雰囲気だったじゃない。そういうとアリスが肩を竦めるので、私はため息をつく。
「で、お話って？魔法使いなんて魔法の話しか出来ないわよ、貴女のお眼鏡にかなうかしらね」
　話してみないとわからんさね。もしかしたら私も将来魔法少女になるかもしれないし。あ、今のうちに変身の決め台詞でも決めておこうかな。
「魔法少女という言葉がイマイチピンとこないのは何故かしらね」
　そりゃあ可憐さが足りないからよ。都会派の貴女には子供に見えるかしらね？
「バカにしてるのね？姉妹揃って性格の悪いこと」
　私はアレよりマシだと思ったんでしょ。まぁその通りだけどね。お姉ちゃんには敵わないけどこれくらいいっぱいいるでしょうに。
「あの姉にしてこの妹あり、と。こんな可憐な女の子をいじめて楽しい？」
　おお、やるねぇ。流石は幻想少女の端くれ。
「端くれかい。というか何よ幻想少女って」
　お姉ちゃんが私たちは幻想少女だって言ってた。多分幻想郷に住んでる少女って意味なんだと思う。

ここからは私の推測だけど、お姉ちゃんはかなり自分のことを客観的に見てる。それは見過ぎてると言っても過言じゃあない。だから幻想郷っていう結界の中で人ならざるものとして生きる私たちは幻想少女なのだろう。

「幻想少女、ねぇ。随分と詩的な表現だわ」

お姉ちゃん、よく書き物してるからねー。あ、そうだ。一本吸ってもいい？

「は？何を？」

煙草。

「とは？」

これ。

そう言って私は煙草をアリスに見せる。吸う、という表現を理解できずにいるのだろう。私は無言で煙草に火をつける。

「ははぁ、火で燃やして煙を吸うのね。それで、吸うと気分がいいとか？」

私は喋らないので首を縦に振る。そして当然のように煙を吐く。

するとアリスは顔を思い切りしかめて手で煙を払う仕草をした。そして不機嫌な表情で何かを唱えると煙が浄化される。おお、便利な魔法だね。

「吸うとは聞いたけど、吐くとは聞いてない」

なるほど、それは確かに。この一連の動作を吸うというのだけれど。

「魔法使いとしては納得いかない理論には反論を申し立てたいのだけれどね」

私は魔法使いじゃないから受け付けませーん。残念でした。

「はぁ・・・もう、煙草を吸う魔法少女なんていてたまるかっての」

次からは私の方を向いて吐かないで、と釘を刺された。こりゃ失敗、私だって相手の機嫌を損ねたい訳じゃない。しかし素直に謝るとアリスは微笑んで許してくれた。そして手を軽く振り私に別れを告げる。動作の一つ一つが絵になるなぁ、とぼんやりと思うのだった。

タイトル『サブタレイニアンローズ』

お姉ちゃん、どうして泣いてるの？私は大丈夫なのに。
お姉ちゃん、どうして泣いてるの？私はもう泣いてないのに。
お姉ちゃん、どうして――――。
「・・・・・・」
横から冷ややかな眼差しを受け取りながらも私は筆を止めない。冷ややかな眼差しを送るのは私の姉、古明地さとりである。ああ、お姉ちゃんどうして――――。
「いやなに、あたかもノンフィクションかのように悲劇のストーリーを書き始めた妹にどう接したらいいのかわからなくてね」
なるほど、しかし私の筆は止まることを知らない。
血に濡れた小さな部屋の中、ナイフが深く刺さった瞳の前に呆然と立ち尽くす小さな少女。彼女は泣いていた。それがなにを意味するか彼女はよく知っていたから。
「泣いてなかったでしょ。流石に驚いたけどね」
泣いてなかったか。でも泣いてたほうがそれっぽいからそういうことにしておく。そう、彼女は泣いていた。
「だいたい血に濡れたって何よ。あんたが突然『今日からサトリ妖怪やめる！もう嫌！』とか言い出して閉じたんでしょうが。本当にできるとは思わなかったけども」
それはもう私のストレスがマッハだったからね。お姉ちゃんはよく私のことを守ってくれたけど、私はあんな汚い心の中を読むなんて真っ平御免よ。誰が好き好んでドブ川を覗きに行くのよ。
「ドブ川に慣れれば気にならないでしょうに。なんて勿体無いことを」
お姉ちゃんは流石に図太すぎると思う。妖怪は基本精神攻撃に弱いけど、ここまで精神が強靭な妖怪を私は知らない。
「それに、急に私のように書き物をしたいと言い出すから何かと思え

ば」
　こんなくだらないものをって？わかってないなぁ、今の流行は悲劇のストーリーよ。これで売れっ子作家になって知名度アップ！
「昔から悲劇は流行ってるけどね。そんなに簡単に上手くいくと思ってるの？」
　いくかもしれないじゃん。人の心は読みたくないけど人気者にはなりたいの。だから私は売れっ子作家になるよ！
　だいたい、お姉ちゃんだって最初に私が書き物をしたいって言った時はすんなり許してくれたじゃない。まあ、『好きにすれば？』とかいう超絶冷たいお言葉を頂いたんですけどね。
「そりゃあまぁ、優秀な姉に憧れて真似をする妹を止める理由なんてないし？私には敵わないだろうけれど、好きにやらせるのがいいとも言うじゃない」
　うわーこれこれ、それでこそ私のお姉ちゃんだよ。もし仮に自分を１０段階評価するなら１１点をつけちゃうようなこの感じね。うわぁどうしよう、私の書いてる小説に出てくるお姉ちゃんとかけ離れてる。
「あんたがかけ離してるのよ。そして離れていくのは私ではなくてそのキャラクター」
　こんな綺麗なキャラクターになりたいと思いませんか？
「別に」
　ですよね。
「ま、でもフィクションとしてはいい出来なんじゃないかしら？一般人からしたらサトリ妖怪のことなんてわからないでしょうけど」
　あ、それもそっか。じゃあこの話はボツ？
「それも勿体無い。私たちにしかわからないのなら、万人にわかるように設定をいじればいい」
　どんな風に？人間にはサードアイなんて付いてないじゃない。
「それは人間にとって大切なものに置き換えればいいのよ」
　なるほど、心臓だね！
「思い切りナイフ刺さってなかった？」

南無。んー、じゃあ刺さっても死なない部位がいいね。
「ナイフは外せないのね」
当然。悲劇はナイフと共にあると言っても過言じゃないわ。ナイフが出てこない悲劇なんて所詮はタンスの角に小指をぶつけた程の不幸と大差ないもの。
「恐ろしい偏見がどこから来てるのかは聞かないけど、まぁ好きにすればいいんじゃない？」
そうだ、私たちのサードアイも人間にとっては目みたいなものよね。そこから始めましょう！
「くわばらくわばら。いつの間にこんな残虐な子に育ってしまったかしらね」
失礼な。

そして、こいしが書いた本は彼女自身が歩き回って配った。最初は地霊殿の者へ。そして地底に住む妖怪たちへ。果ては地上の人間にまで。色んなところを歩き回って配り続けた。
「ご、ごべんなざいぃ・・・あだい、さとり様にごんなに悲しい過去があっだなんでじらなぐで・・・」
「お燐？これフィクションだからね？真に受けなくていいからね？」
「うぁぁぁ・・・」
暫くの間、古明地姉妹を見る目は同情を含むものになり、さとりは少しばかり後悔した。
「本当に売れるとは・・・」

マジカル☆大図書館

幻想郷の住人なら一度は耳にしたことがあるであろう、吸血鬼が住むと言われている館。その真紅の見た目に違わず名前は紅魔館という。私たち勇者一行は吸血鬼退治のため霧の湖にあるというその館を目指すのだった――――。

というのは嘘で、まぁ私には吸血鬼の友達がいるのだ。要は友達の家にアポ無しで行こうとしてるだけ。

紅魔館の中は広い。そしてこれを管理している人間も恐ろしく優秀なため、門番が仕事をするまでもないらしい（多分普通に寝てるだけだと思う）。

そんなこの屋敷の誰が友達なのかというと、フランドール・スカーレットという館の主人の妹なのだ。私が勝手にここに入った時、勝手にフランに会って、勝手に意気投合したという経緯だ。もちろん館の主人、レミリア・スカーレットとの面識もなくはないけれど、初めてこの館で話したのはフランだった。

そんなわけで万が一見つかっても私は特にお咎めもないだろうし、あっても都合が悪くて帰されるくらいだろう。だからこうして、暇だからという理由で誰もが恐れる吸血鬼の館に侵入しているのだ。

「そしてなぜ貴女がここに来るのか、それがわからない」

ふむ、理由をあえてつけるとしたら『なんとなく』だね。そう言った私にこれ見よがしとため息を吐くのは館の図書館の管理人、パチュリー・クーリッシュさん。

「ノーレッジよ。私は誰に紹介されてるのかしら？」

私も誰かに紹介するつもりはないけど、なんとなくこうしなければという脅迫概念に襲われてるの。

「それはまあ安っぽい脅迫概念ね。それで、貴女はどうしてここに？」

２回も同じ事を聞くのはナンセンスだと思わない？私は貴女の心を読めないから言いたいことはちゃんと伝えないと。

「あまり長く喋りたくはないのだけれど。今のは『どうして面識のあ

るフランドールやレミィのところに行かずにわざわざ私のところへ来たの？』という意味よ。なんとなくで来たとしても、友人であるフランドールのところに行かない理由はない」
　一息に話してからゴホゴホと咳を挟むパッチェさん。ふむふむ、確かに彼女の疑問はもっともだ。しかし敢えて言おう、そんなこともわからないのかねワトソン君。
「この私をしてワトソン君とは大きく出るわね」
　ありゃ、怒らせちゃった。まあそれは置いといて。
　理由は簡単、フランの反応が楽しみだからだね。
「ほう、ワトソン君たる私には貴女の発言の意図が理解し難いから出来ればご教授お願い致しますわ」
　謝るから機嫌なおしてよ、ね？呆れたようにため息を吐くパッチェさんを確認すると私はこの愉悦計画の全貌を話し始めた。
　フランは見ての通り友達が少ないからね、私が来た時にはそれはもう嬉しそうな顔をするのよ。おっと顔をしかめないでよ、もうわかっちゃった？まぁ続きを話すけどね。そんなフランもよくここに来るらしいじゃない、魔法のお勉強をしてるとかいう話をこの前聞いたわ。そんなフランには今日は会いに行かず私は図書館に来た痕跡を残す。後日図書館を訪れたフランは気づくの、『あれ？もしかしてこいしが来てた？』ってね。そして当然自分に会いに来なかった理由を考える。嫌われた？とか飽きられた？とか色々と邪推し始めるわけ。きっと色んなことを考えて落ち込んだり不安になったりするんだろうね。ああ、たまらないわ！
「吐き気を催す悪人とはまさにこれのことね」
　そしてそんなフランを目撃したレミリアは当然理由を聞く。あれでもシスコンだからね。知ってるって？うんうん。いつもは姉を好いてるようには見えないフランだけど、あれでも素直な子だからね。落ち込んでる理由をきっとレミリアに話すでしょう。レミリアは私に少なからずコンプレックスがあるからね、きっとフランに気に入られてる私に対して複雑な感情を持ってる。お、当たり？ふふふ。そうして私のことで悩んでるフランも、それを解決できない自分自身もも

どかしくて仕方がないことでしょう。ああ、たまらないわ！
「どうして愛という感情は歪んでいくんでしょうね」
常にドラマチックに生きていたいと思います。
「そう。で、それを私に話しても良かったのかしら？もしかしたら私が今ここにフランを呼んでくるかもしれない」
んにゃ、そんなことはしないよ。だって貴女、お姉ちゃんと同じくらい自分以外はどうでもいい人でしょう？
「アレと同列に扱われるか。まあ否定はしないのだけれどね」
そういうことよ。あとはまあ適当に、私が来たってわかる物を置いておけばいいかな。うーん、何にしよう。
「図書館に害がなければなんでもいい。そもそもあの子は匂いとかでそういうのわかると思うわよ」
え、怖。あの子も大概だよね。
「だから意気投合したんじゃないの？ほら、同じ頭がアレな者同士で」
言い方。うーん、私はお姉ちゃんに育てられた可哀想な子だからなぁ。
「天然物の出来だと思うけどね。あ、言い忘れてた。ここで煙草を吸おうとしたら頭から水を被せるからその気でいるように」
え、誰から聞いたのその話。
「この前アリスが来た時に貴女の話をしてたわよ？有毒ガスを吹きつけられたってね」
そんな危険生物みたいに言わないでよ。そういえば貴女は体調悪いんだっけ？それならやめといたほうがいいね。
「そういうこと。まだ心が残っててよかったわ」
下手したらお姉ちゃんと同列に扱われてそうだねこれ。お互い様ってことか。
「あ、あと魔法少女になりたいんだっけ？持ってかないなら別にここで読んでてもいいわよ、魔法に関する本」
うーん、魔法少女は魔法を使うというより悪と戦う正義の女の子だからなぁ。あ、パッチェさんは似合うと思うよ、触手と戦う女の子。
「誰がパッチェさんだ。そしてそんな役割も御免よ」

えー絶対似合うのに。とにかく魔法少女に必要なのは変身と正義の心、魔法じゃないんだよ。
「じゃあ貴女には無理ね。変身はともかく正義の心は持ってないじゃない」
そんなことないよ?私は常に平和を願う心優しい女の子。
「人の心を弄んで優しい女の子とはね。それにしても変身って、何になるのよ」
何にって、魔法少女にだよ。胸元に大きなリボンをつけた専用コスチュームに着替えて戦うの!
「専用コスチューム、胸元にリボンねぇ。ふむ」
そういうとパッチェさんは少し考え、おもむろに席を立った。その後に何かの呪文を唱え、
「変身」
パッチェさんを包む虹色の光。体はシルエットから裸になっているのが伺える。そして腕、足、体と衣装が変わったところから光は消え、最後に胸元の大きなリボンの出現と共に虹色の光は弾けた。こ、これは魔法少女の変身!?
「こんなものかしら?」
な、なん・・・だと・・・。今のはまさしく変身。まさか、これも魔法だというのか――!?
「そうよ、これも魔法。魔法の原点は不可能を可能にすること。出来ないことなんてないのよ」
その魔法、私に教えてください!!!

重い女は可愛い

私はまだ図書館にいる。理由は簡単だ。

「へーんしん！」

ポーズを決め決め台詞を叫んでも私を虹色の光が包むだけで衣装は変わらない。うーん。

「むしろ何故虹色の光を発するのか知りたいわね。こんな短時間で魔法を習得したとか言われたら泣けてくるわ」

フランドールもそうだったけど、と付け加えるパッさん。あ、にらまれた。パッチェさんね、うん。

「どうでもいいけどね。一体見よう見まねでどうしてそんなことができるのかしら」

そうは言われても、魔法使いが魔力？を使ってるのと同じように妖力を使っているだけだ。現に替えの服を持ってきていない私は変身ができない。

「それはこの服が魔力によって形成されてるからに他ならない。直すのも改造するのも私次第ってわけさね」

それは無理だ。私の服は私の妖力でてきているものじゃなくて普通の服だから。くっ、殺せ。

「いや殺さないけど。しかしなるほど、弾幕ごっこなんてやってるわけだから理に適ってはいる」

別に扱ってる力の種類が違うだけで、やってることは同じだからね。魔法と見間違えたのなら、吸血鬼みたいに私の妖力が魔力に近いだけのお話。

「納得。疑問も解けたところで、そろそろかしらね」

そろそろ？なにが？

そう答えると同時に勢いよく図書館の扉が開き、何かが私の元に突っ込んでくる。マジですか。

「こいしー!!」

私の元に今にも着弾して来ようとするのは、我が友フランドールではないか。当然死にたくないので私は避け、床に着弾する前にパッチェさんが魔法で食い止めた。
「お願いだから壊さないで」
「はーい！」
きっと同じ過ちを繰り返すんだろうなぁと思う。でもどうして私がきているのがバレたんだろう。
「パチュリーが教えてくれたの！こいしがきてるよって！」
え？嘘でしょ。パッチェさんの方を見ると心底意地の悪い笑顔で返された。
「高を括ってる奴に一杯食わせるのは楽しいったらありゃしないわね。ねぇホームズさん？」
わぁ、まだ根に持ってたのね。
「ねぇ、どうして私に会いにきてくれなかったの？忙しかったの？もしかして嫌われた？それとも飽きちゃった？ねぇ、ダメなところがあったら治すから遠慮なく言って？」
かわいいいいいいいいい!!不安そうな光のない目で私の体をゆさゆさと揺らすフラン。今にも泣きだしそう。
「ううん、用事があっただけよ」
「本当？」
「うん、本当」
フランの顔がパッと明るくなる。不安そうに涙をためた目は太陽なような笑みに。こりゃ堪りませんわ。
そんなことを考えているとちょいちょいと赤髪の女に肩を突かれる。この子は『こあ』、パッチェさんが小悪魔って呼んでたから。
「いやぁ、こいしさんも中々いい趣味してますねぇ」
貴女に言われるのは心外。ここの図書館にはろくな人がいない。
「ね、こいし。私の部屋であそぼ？退屈で仕方なかったんだから」
「うん、いいよ」
どうせ私も暇だったし、という言葉を飲み込む。危ない危ない、さっき用事があるって言ったばかりなのに。いや、敢えて口を滑らせ

て追及されるのも悪くないかな？再びハイライトが無くなるフランを想像して唸る。

「はやくー」

いいや、今日は普通に遊びましょうかね。

青春の河原とオムライス

私はお姉ちゃんが何をしようとどんな悪事を働こうと何一つ咎めるつもりはない。それはこれからも変わらない、きっと一生変わらない。けれども、今この時だけは、私はお姉ちゃんを許すことができない。

「ふぅ…いい加減大人になりなさいな。古明地家の次女たるものこの程度で取り乱すなんて情けない」

この程度だと?ふざけるな。この無惨にも更地にされたコレを見ても何も思わないのか。

「ええ、何も」

ならもう何も言うことはない。姉妹喧嘩の決着は殴り合い。全力で貴女に制裁を加えてあげる。

「姉に勝とうとは。今まで一度も勝てたことないのに?」

そんなの、やってみなくちゃわからない!

「まあまあ、プリンならあたいがもう一個作ってあげますから…」

違う!そんなことで解決できる問題じゃないんだ。新しいプリンで救われるのは私の舌だけ。この悲しみに染まった心は救われないんだ。

「あんたが一日中帰ってこないから悪いんじゃない。せっかくのプリンがダメになっちゃ勿体無いでしょ?」

そんなすぐ腐るわけないでしょ!冷蔵庫に入れててくれればよかったじゃん!

どんなことが起きても今回ばかりは許すつもりはない。河原へ行こうぜ、久々にキレちまったよ…。

地底にも川が流れている。そして川の周りだけ、地上と同じように植物が自然に発生している。
「前の喧嘩は何十年前かしらね？ここでやったっけか」
覚えてない。なんとなくそんな気がするけど。前はどんな理由でやったっけ？食べ物？別のこと？思い出せない。
「あらあら、いつの間にやらギャラリーが。よかったわねぇ目立って」
本当だ。あんまり気にならなかった。正直今はどうでもいい、目の前のことしか頭にない。
「要はムシャクシャするから憂さ晴らしがしたいんでしょう？かかってきなさいな、姉として全部受け止めてあげるわ」
八つ当たり、と顔に書いてある。その通りだよ！

お姉ちゃんに勝てるのは私だけだ。理由は簡単、お姉ちゃんが心を読めないのが私だけだから。
でも私はお姉ちゃんに勝ったことがない。理由は簡単、お姉ちゃんが強いから。
「はっ！」
鋭い蹴りが腹部に突き刺さる。あの体のどこからこんなパワーが出てくるのやら、と同じ体型をしてる自分を棚にあげる。しばらく空中に舞い上がって、地面に叩きつけられる感触とともに起き上がる。追撃はなし、ふぅ。
「気は済んだかしら」
「まだ」
「そう」
呆れた表情で前に踏み出そうとするお姉ちゃんの足が止まる。
「管…」
「正解」
お姉ちゃんの足に巻きついてるのは私のサードアイの管。それが地面から顔を出して足首に絡みつく。

サードアイに力を込めると地面が割れる。そして急激に管は縮み私とお姉ちゃんとの距離は短くなっていく。ここまでくれば射程圏内、拳を躱される心配もない。
「あんた正気？」
目の前まで連れてこられたお姉ちゃんはなおも呆れ顔だ。何故なら私も条件は同じ、お姉ちゃんからの攻撃もかわすことができないから。
「我慢強さには自信があるからね」
「目を閉じたくせに」
「それはそれ」
そこからは文字通りの子供の喧嘩だった。殴る蹴るほっぺを抓る髪を引っ張ると、お互いに涙目になりながらあの手この手で相手を負かそうとする。
途中で倒れ込んでからはお互いどちらが馬乗りになるかでゴロゴロと転がっていき最終的には川にダイブした。
「はぁ…はぁ…」
「はっ…はっ…」
ついに息も切れ切れ、どちらからともなく仰向けに倒れこむ。うん、引き分けならまあいいかな。
「これは…帰ったらお説教されるね…」
ギャラリーの中に心配そうに見つめるペットたちの顔を見つけた。きっとお燐は今日晩御飯を作ってはくれないだろう。
「喧嘩両成敗ってね…ふふ…」
酒の肴になんぞしやがって。こちとら本気の姉妹喧嘩だぞ、鬼の酒盛りのためにやってるんじゃない。
と、こんなことも気にするからまだまだ目を開けられないのだ。
「久々にひどい目にあったわ、全く」
「ふふふ、お姉ちゃんの負け？」
「馬鹿言うんじゃない、引き分けってことにしてやるわよ」
そういうとお姉ちゃんは一本タバコを差し出してきた。
「吸う？」

「…うん」
それからはどちらも喋らなかった。ただ、お姉ちゃんも私も今日の晩御飯のことを考えていることだけは確かだった。

当然自分たちで作ることになった今日の晩御飯はオムライスになった。ケチャップの文字をお互いに書き合うのだけは昔から変わらない。

『『仲直り』』

過保護な放任

主人の趣味で紅色に染められたこの館は見るものの目を奪うと言われている。正確には目が悪くなるだと思うけど、かっこいい方が好きなんだろうと思う。でもうちもステンドグラスとか、エントランスホールの作りとか結構目に悪くて人のこと言えないんだろうなーと思ったりもする。

「それで、今度は私のところに？」

そんな趣味の悪い館の主人がまさに目の前にいる。そんな嫌そうな顔しなくても。

「してないわよ。…多分」

私の瞳にも映らない貴女の顔は他ならぬ貴女以外しか見ることができない。不便じゃない？

「別に。自分の顔以外は見えるし、私の顔は美しいからね」

すっごい自信、実際に可愛い貴女が言うと説得力があるね。

「貴女のお姉ちゃんも可愛いと思うわよ？」

お、フォローが入った。よかったねお姉ちゃん。まあ顔は多分私の方が可愛いけど。

「勝るとも劣らず、と言っておくわ。不仲を望むわけじゃないしね」

でもフランと仲良い私に少なからず嫉妬してるでしょう？

「…ノーコメント」

隠さなくてもいいのにー。あ、じゃあどうしてフランのところに行かないの？って思ってるでしょ。まあ今回は単純に用事があっただけなんだけどね。

「貴女が私とフランをより不仲にしようと企んでるのかと思ったわ」

流石にそんなことはないよ。私に得がないじゃない。

「損得勘定で動くのは良いことよ。快楽主義者は己の損も他人の損も顧みない奴がたくさんいるからね」

まぁ怖い。聖徳太子様のことだね。

「…否定はせんよ。あそこにはそういう奴が沢山いる、とだけ」
お寺の人はあまり好きじゃないみたい。私はどうでも良いけど商売敵と言っちゃあ無視できないわよね。
「…そういや、こいしちゃんは命蓮寺に入信したんだって？よく反対されなかったわね」
お姉ちゃん、大体私に干渉しないからね。『自分のことは自分で決めろ、その代わり責任も自分で取れ。どうしようもなくなったら私に泣きついて来なさい』って言われてるよ。
「……良い姉ね。私よりもずっと」
どうして？貴女はフランのこと好きだし、それで良いじゃない。
「それだけじゃダメなのよ。過保護なのも、それをフランが嫌がってるのも、全部知ってるのにどうしようもなく臆病になってしまう。どうしてでしょうね？」
うーん、やっぱり大切だから？それとも今まで放っておいたから？
「容赦がないわねぇ。でも、きっとそうなんでしょうね。私たちは距離を置きすぎた」
私たちと逆だね。まあ、フランにその優しさが伝わってないのは惜しいけれど。
「逆？」
お姉ちゃんは私が瞳を閉じたのを、自分の過保護のせいだと思ってるからね。今もかは知らないけど、少なくともこの放任主義は半分それ。もう半分は無意識の私を見つけたり止めたりするのが難しいから。
「どっちが正しいんでしょうね、過保護か放任か」
どっちも、としか。過ぎたるは及ばざるが如し、ちょうどいい距離を保つのが一番いいと思うよ。
「それが難しいから悩んでるんじゃない」
うちも人のこと言えないからなぁ。でも、目標があり目指すところがあるか無いかは大きな違いだってお姉ちゃんは言ってたよ。
「…アレも存外、苦労してるのかもねぇ」
毎日泣きながら書類に向かってる時もあるからね。万能のように

見えてもその実他の誰かとも変わらない一面が見られると落ち着くものだよ。
「それも誰かからの受け売り？」
閻魔様が言ってた。あの人だけにはお姉ちゃん、頭が上がらないんだよね。
「そりゃまた珍し…くもないか、あの閻魔だものね」
そうそう、誰にだって苦手と得意があるんだから、わざわざ苦手なことをする必要もないと思うよ。
あ、紅茶なくなっちゃった。それじゃあ私はこの辺で帰ろうかな。
「ねぇ、結局貴女の用事ってなに？」
おっと、忘れるところだった。お姉ちゃんから手紙を預かってるんだった。はいどうぞ。
「最初に渡せばよかったじゃない」
そう言ってレミリアは封筒を開け手紙に目を通す。その顔に出てるのは驚き、目を丸く見開いて文字を追っている。
なにが書いてあったの？
「…ふぅん、珍しい。いやなに、会議のお知らせさ。ただあいつが地上で行われる時に来た試しがなくてね。毎回ペットの猫にお使いをさせるだけだ」
うんうん。今じゃ慣れたけど昔はお燐もビクビクしながら行ってたもん。そりゃあ自分よりも怖い妖怪ばっかりのところに行きたくはないよねぇ。
「ところが今回はあいつ自ら来ると言ったもんだ。どういう風の吹き回しか」
それはほんとうに珍しい。まぁきっと、気まぐれなんかじゃなくて――。
「裏がある、だろ？そういう奴だもの、そう思われるのも見越して参加するんだろうよ」
なるほど。まぁ私もお姉ちゃんに干渉することなんてないからね。ほとんど他人事だけど、まあ頑張ってね。
「ククク、この私に心配なんて無用よ。精々楽しませてもらうわ」

うんうん、いつもの調子に戻ったね。それじゃあ今度こそ私は帰るから、次は3人で遊べるといいね。

移ろい行く先は

命蓮寺に入信する。そう言った時お姉ちゃんは酷く驚いていたけれど、特に止めることも理由を聞くこともしなかった。
『よく見極めなさい。その教義は理屈なき神によるもの。よく聞きよく考え、貴女が取り込める分だけ学びなさい。外側の私たちにはいいとこ取りの権利がある』
それ以外はなにも言わなかった。お姉ちゃんが真剣な顔で私に何かを言う時、無意識下でもそれだけは守ってきた。
命蓮寺の人たちは、比較的束縛の少ない方だと思う。飲酒は寺と無関係なところで、趣向品は禁止しないけどなるべく控える。そんな程度だった。なんなら、飲酒してる人もいたし。
「あ、こいしちゃん。昼ごはんの準備手伝ってくれない？」
この人は一輪と呼ばれていた。見たことあると思ってたけど、宗教戦争をやってた時に戦ってるのを見かけた覚えがある。そもそも、この人たちは地底に封印されていた事があるから、なんとなしに顔を覚えてる人は多い。何人かを除いてだけど。
「今日は冷えるからあったかい物にしたいわねぇ。何かいい案ないかしら」
鍋とか良いんじゃない？冬と言ったら鍋みたいなところあるし。
「昼からそんなにがっつり？…まぁ、いっか。お野菜切らないとね～」
ちらりと台所にあるお酒を一瞥する一輪。結局お酒好きな人の方が多いお寺だった。
前に一度なんでお酒を我慢してこの寺にあるのか聞いたことがある。何人かに聞いたけど、帰ってきた答えはどれも同じ。信仰しているのは教義ではなく聖だから、だった。
聖はこのお寺で一番偉い人の名前だ。みんな彼女を慕ってこの寺にいる。
「こいしちゃんは鍋に水入れて火にかけといて～」

は～い。
私の見極めはまだ終わらない。

昼食後、私が縁側で暇を持て余してると誰かが隣に座った。聖だった。
「このお寺にはもう慣れましたか？」
うん、堅苦しいのもないし、不便もそんなに。でも良いの？私は修行もしてないし、結構好き勝手やってるけど。
「構いませんよ。だって貴女は入信ではなく見学をしたい、と言いましたからね」
私はお姉ちゃんの言葉をもらい、再度命蓮寺を訪れた時にそう言った。聖は快く承諾したけれど、かれこれ3ヶ月ほど経った今でも見学中だ。暇な時に適当に行って、適当に命蓮寺の人たちと過ごす。見学というかもはや遊びにきているような感じだった。
「正直なことを言いますと、貴女が入信するつもりがないのもわかっています。それでも私…いえ、私たちは貴女がここにきてくれることを嬉しく思うのですよ」
それはどうして？
「簡単ですよ。何度も来てくれるということは、少なからず私たちを好いてここに訪れるのでしょう。それが嬉しくない人はいませんよ」
あんまり意識したことなかったけど、そうなのかも。うんうん、友達が遊びに来てくれたら嬉しいもんね。
「その通りです。それに、貴女はよく考え行動する人です。同じ考えの者だけが集まっていても、進展は大きくないのです」
そういうものかな。でもきっと、お姉ちゃんが私に入信を許したのもそういうことなんだろうな。
結果的に入信はしなかったけれど、私は退屈しないし新しい発見もある。そんな成長を期待して私を送り出したんだと思う。
「とても賢い方なのですね、さとりさんは。そして貴女を信頼しているからこそ送り出したのでしょう」

でも自分たちの宗教が利用されてるってことだよ？仏教的にはお姉ちゃんみたいなクズは許せないんじゃない？

そう聞くとクスクスと笑いながら聖は首を横に振った。

「仏教は人を裁くためのものではありませんよ。そしてこの世で誰かが正しいと決まっていないように、仏教もまたこの世の全てでは無いのです」

難しい話だね。じゃあどうして貴女は仏教を信じるの？

「それもまた難しい話です。私が信じると決めたから、としか言えませんね」

それから少し考えて再び口を開く。

「何かを目指して仏教を信じているわけではありません。ただ自分の在り方として、仏教の教義を実現しようとしているだけですから」

じゃあ、目標とか無いの？無いのにずっと教義を守るってこと？

「まあ、そういうことになりますね。ただ…妖怪と人間が共存できる世界を仏教で実現できたら、と思うようにはなりました」

少し悲しそうに、少し懐かしそうに昔を想う目だった。

でもそれは無理。絶対に無理。人間も妖怪も、お手手を繋いで仲良くなんて無理。だって私は人間の心の中を見てしまったから。他の妖怪の心も見てしまったから。その心の中のどす黒い感情は私たちの中に住み続けて溝を深めるばかりだ。

「それはきっと、貴女の経験がそういうのでしょうね。私と貴女で生きてきた道筋は違います、それが今の私たちの考え方の違いに現れるのは当然のことです」

…なんだか負けた気分。そう言われると言い返せないじゃない。

気分転換に煙草を取り出して火をつける。聖は顔色一つ変えずに煙の行方を眺めていた。

「私たちも人間によって封印された身ですが…それでも、信じたいのです」

向き合うことができなかったのは、私だけだったのかな。

不器用お姉ちゃんズ

私はとても大きい館の主人の妹、つまりお嬢様である。…正直数百年前に惨めに隠れながら生活をしていた頃を考えるとありえないと思えるくらいの生活をしてる。

そんなことは置いておいて、紅魔館に行ったときもそうだったけど、何かと大きな館での趣向品は紅茶と決まっているものだ。紅茶の茶葉は外の世界では大量に量産されているらしく、もう高級品とは言えない。だというのに、紅茶を飲んでいるだけで何故か高貴な身分であるという錯覚すら覚える。どんなに不味い紅茶でも。

「つまり貴女は私が淹れた紅茶に文句があるのね？」

渋い。それはもう渋すぎるという言葉じゃ足りないくらいに。どれだけティーパックをつけておいたらこんなことになるの？

「良いじゃない、味が濃くてお得でしょ？」

お姉ちゃんみたいな舌バカと一緒にしないでくれる？目玉焼きにソースかけるような人だもん、きっと薄味じゃ無味と変わらないに違いない。

「調味料についての論争は不毛だからやめておきなさい。それに…うん、そこまで濃くないわよ」

それは私の後に淹れた消費済みのティーパックだからでしょ。

「文句ばっかり。あんたが急に紅茶が飲みたいとか言い出したからお燐がいない今この私がわざわざ直々にこうして紅茶を淹れてあげたというのに」

そうだね、ごめんね。もう頼まないから許してね。

「失礼が過ぎると思わない？」

思わない。

「へぇ、それで家出してきたの？」
いや全然。暇だから遊びに来ただけよ。
「私はこいしが来てくれればなんでもいいけどね」
そういえば、とフランが思い出したように続ける。
「ついこの間似たようなことがあったわ。お姉さまが私に…まあ正確には私たちのおやつにだけど、チョコレートのケーキを焼いてくれたの」
へぇ、あのレミリアが。それで？
「咲夜に手伝ってもらったみたいで、明らかに形の綺麗なのが2，3個あったんだけど。まあ、大体は整ってない形のばっかり」
簡単に想像できちゃう。砂糖と塩間違ってたりしなかったの？
「咲夜が見てるから大丈夫だったんでしょ。そんで、『これお姉さまが作ったの？』って聞いたら『ど、どうでもいいでしょそんなこと！早く食べましょ！』ってはぐらかされてさ。私が食べようとしてる時もソワソワとこっち見てたからわかりやすいのなんのってね」
なんだか、出来る時と下手打つ時が両極端だよね。可愛らしいところでもあるけど。
で、美味しかったの？
「うーん、まあまあ？咲夜が作るのと比べちゃ劣るけど、食べられないほどじゃないし。どうせ咲夜の手伝いがなかったらとんでもないものが出来上がったに違いないわ」
文句言わないの？咲夜の作ったほうがよかったーなんて言いそうなもんだけど。
「私をどんな奴だと思ってるのよ。そりゃあ咲夜が作ったほうが美味しいけど、明らかに私の反応を見てる感じ私のために作ったものでしょ？食べられないほどまずかったら文句も出るけど、せっかく私に作ってくれたものを無下にするのも悪いじゃない」
…確かに。むむむ。
「さとりさんに文句言ったのを後悔してるの？だったら謝ればいいじゃない、変なとこで強情なのは悪いところね」
乙女心は複雑なんですぅ～。…まあ、ちょっとだけ話してみようか

な。ちょっとだけね。
「はいはい、素直じゃないんだから。今日はもう帰ったら？」
珍しい、いつも引き止めるくせに。
そういうとフランはふふんと鼻を鳴らした。
「私の隣にいるのに、私以外のことをずっと考えてるなんて許さないわ」
さいですか…。

「あ、あのさお姉ちゃん」
「どうしたのよ、クネクネして」
クネクネってなに。いやいや、今はそんなことどうでもいいでしょ。
「あの、この間の紅茶さ。すごい渋くて不味かったけど…」
「この期に及んでまだケンカを売るか。買ってやってもいいわよ」
「違くて！その…不味かったけど、また淹れてくれる？」
そういうとお姉ちゃんは余計に怪訝な顔になった。
「何か変なものでも食べた？不味いものを食べたいなんて正気？」
こ、この姉は私の気も知らないで…。
「お姉ちゃんのバカ！アホ！人でなし！大好き！」
私は全速力で地霊殿から出ていくのだった。

「なんだったのかしら…」

霊夢とこいしの本当になんでもない一日

幻想郷は人間と妖怪の入り乱れる無法地帯。人が人を食い妖怪もまた人を食う。じゃあ誰がこの幻想郷の秩序を保っているの？その答えはこの神社にある。

「掃除の邪魔」

そう言わないでよ。せっかく来てあげたのにそんなに邪険に扱うことないじゃない。

「誰も来いなんて言ってないわよ」

言われてないねぇ。でもお燐は良くて私はダメなのはずるいじゃない、猫だから？猫だから許されるの？うん？

「確かに。あんたも猫になれば居ても良いわよ」

無理に決まってるでしょー。

この暇そうな神社の暇そうな巫女は博麗霊夢。幻想郷の調停者と言っても過言じゃない。

「あとそれ、煙たいからあんまり出さないでくれる？」

えー、せっかく落ち着いて煙草が吸える場所を見つけたのに。これでも人に気を使って最近は人と会う時は控えてたんだから。

「知らないわよ。ていうかそんな火のついたものそこに落としてみなさい、火だるまの刑よ」

人間とは思えないほど残酷なこと考えるね。まあほら、吸い殻なんて妖力で消し炭にしちゃえば良いんだからさ。

「ならいいけど。まったく、なんでうちには妖怪ばっかり集まるんだか」

妖怪みたいな人間が巫女だからじゃない？あ、うそうそ。嘘だから怒らないで、ね？

「お掃除終わり、っと」
お疲れ様。ねえ霊夢、最近なんか変わったこととかなかった？
「変わったこと？いや特に…」
えー、じゃあ異変の話とか聞かせてよ。
「異変って言っても、邪魔してくるやつを倒してるだけだからあんまり覚えてないのよねぇ」
妖怪どころじゃないねこりゃ。私が言えたことじゃないけどもうちょっと華のある人生を送ったら？そんなふわふわ生きてても味気ないでしょーに。
「余計なお世話よ。それに私は平穏が一番なの、そんな派手な人生を送りたがるのは魔理沙くらいね」
可愛くないねぇ。せめて笑顔で人と話したら？ほら、笑って笑ってーぐにぐに。
「なるほど、あんたも笑顔にしてやろうか？」
すいませんでした。そんなことよりお茶が欲しいな、喉乾いちゃった。
「図々しいわねぇ。そこで待ってなさい」
お、お茶出てくるんだ。半分、いや８割くらいは無理だろうと思ってたけど案外すんなりと。
「ほら、これ飲んだら帰りなさいよ」
どうしよっかなぁ。あ、そうだ！あの子の話聞かせてよ、外の世界からたまに遊びにくる子。
「うーん、菫子のこと？別にいいけど、なんでまた」
興味があるからに決まってるじゃん。今日は来てないの？
「さあ？来てても別のところにいるのかもしれないし。話ってどんな話を聞かせればいいわけ？」
ちょっと決闘したくらいだからどんな子か知らないんだよね。なんでもいいから、エピソードとか。
「そうねぇ…この間『すまーとふぉん』って機械で『いんすたぐらむ』をしてる話を聞いたんだけどね…」

「これくらいかしら。満足した？」
いやー面白かった。どこかで会えないかな？
「あんたと同じで神出鬼没だからね。次にあの子が寝た時にこっちに来ればどこかで会えるんじゃない？」
私もその子も神出鬼没じゃあ会える確率の方が低いよね。まあ、気長に待とうかな。
「知り合いが妖怪に食われたなんて話聞きたくないから、変なことしないでよね」
そんなことしませんよーだ。私はそんな野蛮な妖怪じゃないのだ。
「あっそ、会えるといいわね」
会えるよきっと、１００年後とかは流石に死んじゃってるかもだけど。

ハイエース・外来人

へいへーい。へイそこの外来人ちゃん。お菓子あげるから私といいことしない？
「誘い方が最悪すぎる」
なんか変だった？外ではお菓子とかで子供をおびき寄せるって聞いたんだけど。
「私はもうそんな歳じゃないし、その誘い方は間違いなく警察に通報されるわね」
けーさつになんて捕まらないよーだ。とまあ、間違った誘い方をしてしまったのは間違いないみたいだね。うーん、困った。
「いや困ってるのは私なんだけど…あ、貴女見覚えあるわ。えーっと、待って今思い出すから」
もう十分失礼だと思うんですけど。
「いやー名前知らなかったし…でも戦ったことあるよね？えーっと、そう！メリーさん！」
まあ違うんだけどね。メリーさんは持ってるけど私の名前はメリーでもマエベリーでもなく古明地こいし。
「まあ、名前知らなかったし…ってえ？メリーさん持ってるの？」
うん、まだあるよ。ほら。
「うわ、電話かかってきた。これ貴女からのコール…よね、幻想郷で、ましてや夢の中で電話が掛かってくるんだもの」
それ電話？はたての持ってるのと似てるけど、折りたたむやつじゃないんだ。
「あー、あれは『ガラケー』って言ってこれより前の機種ね」
がらけー、きしゅ。うんうん、よくわからないけど古いんだね。はたても新しいのにすればいいのに。
「いやいや、幻想郷でもスマホが作られたらそれはもう外の世界と変わらないわよ。外の世界と断絶したいなら絶対に作っちゃダメね」

便利なのに？
「その便利が人間の最大の武器だからね」
よくわかんないけど、そのうち河童が作るんじゃないかなぁ。

「基本的に霊夢さんから人間の誰かと一緒に行動しろって言われてるのよね。前は魔理沙さんとか妹紅さんとかを頼ってたんだけど今回に限っては二人とも見つからないし…どうしよう」
ふむふむ、護衛役ね？霊夢にしては珍しく随分と他人を気にかけるねぇ。
「そうなの？まあそれはともかく、貴女はどっちかの居場所知ってたりしないの？」
いやいや、いやいやいや。ここにいるじゃん、護衛役にぴったりなとっても強い女の子がさ。
「貴女のこと？でも妖怪だしなぁ…」
えー！妖怪差別はんたーい！種族間格差に終止符をー！
「どうしたのよ急に。いや別に妖怪が信用できないってわけじゃないけど…ほら、中には私を食べようとするような人もいるかもしれないじゃない？」
食べないよ！人間の肉を食べるのなんて野生動物みたいな妖怪だけだし、人型の妖怪は金髪以外は安全だから。
「金髪はダメなの!?まあ、そういうなら信用してもいいけど…」
やったー！お給料は後払いでいいからね。
「いや金取るの!?」

「ひいい！ちょっと！めちゃくちゃ妖怪が襲ってくるんですけど！」
いいじゃん、私が倒してるんだからさ。でも野良妖怪如きじゃ私が

見えないのか、まあ御構い無しに飛びかかってくるねぇ。
「獣！獣が四方八方から！」
はいはい道を開けてねー。君たちみたいな弱い妖怪が塞いでいい道じゃないぞー。
「わー！目玉が！目玉が飛び出してる！」
倒し方に関しては注文されても困るなぁ。それそれ、薔薇の城だぞー！
「割と無茶苦茶なことやってる！本当に強い妖怪だったのね！」
そっちまで疑われてたの？ちんちくりんな見た目で悪かったわねー。
「そこまで言ってないけど…う、血生臭い…」
我慢してね。

「酷い目にあったわ…」
普通なら自分より強い相手には向かってこないんだけど、私が見えてないのか菫子にどんどん群がっていったね。
「出来ればもう貴女には頼みたくない…」
そんなぁ、せっかく頑張って全部倒したのにな。まあ私が連れて行きたいって行ったから文句は言えないけど。
「で、ここには何があるの？」
いや、特にないよ。でもこの丘から見える景色は結構好きなんだ。山の方は菫子じゃ入れないから、もっと身近なところにしようかなって。
「わ、本当だ。綺麗な紅葉…」
もう秋だねぇ。うんうん、落ち着いて煙草も吸えるしいい場所。
「え、貴女煙草吸うの？」
吸うよ。なんか都合悪いことでもあった？
「いや…まぁ私はあんまり煙草好きじゃないけど、その見た目で煙草吸ってるのはまあまあショッキングだわ」
早苗にも似たようなことを言われた気がする。外の世界では私み

たいな小さい子が煙草を吸うのは変なのかな。
「変というか、吸っちゃダメだからね。２０歳未満は煙草を買うことだって禁止されてるんだもの」
私２０どころか何百年も生きてるんだけどなぁ。
「それは見た目。貴女くらいの身長なら、外の世界じゃ間違いなく１０歳前後ね」
随分と成長が早いんだねー人間は。いや、幻想郷でもそんなものだもんね。
「貴女が煙草を吸いたいなら私に止める権利はないけど…」
そう？じゃ、遠慮なく。あ、そうだ。護衛どうだった？また私と散歩したいと思った？
「うーん…たくさん襲われたけどここから見える景色は素敵だし…うん、また頼んでもいいかな」
おー、合格が出た。それじゃあ次は旧地獄にでも行こっか。
「地獄⁉いやいや、やっぱり遠慮させてもら…」
次が楽しみだねー。
「話を聞けよ！」

霧雨魔理沙は笑わない

　ついこの間来たような気がしなくもないけど、またもや魔法の森に来ているこいしちゃんです。今日は最後の魔法少女に会うべくここに来ている訳なんだけど、生憎というか私と同じでフラフラ色んなところに飛んでっちゃうかと思えば家に篭もりきりだったりと会おうとすると会えない子なのだ。
「ふむふむ、それを私の前で言う必要はあるのか？」
　何故か言わないといけない気がしてね。最近人に会うと妙に誰かへの紹介文を考えちゃうんだ。
「なんだそりゃ。ま、お前が変なやつなのは知ってるけどな」
　失礼じゃない魔理沙。人を指しておいて変なやつはあんまりだと思わない？
「ほう。ならお前は私の事をどう思ってるんだ？」
　変なやつ。
「おかしいのは私の記憶とお前の頭とどっちなんだろうな」
　そんなことは置いといてさ、魔理沙も魔法少女なんでしょ？変身してよ、変身。
「突然何を言い出すんだ…。化け物にでもなれって言うのか？」
　そんなわけないでしょ！ヒラヒラの可愛いコスチュームに変身するの！
「生憎そんなものは持ち合わせてないな、他を当たりな」
　えー。いいじゃない魔理沙だってかわいい服着てみたいでしょ？女の子は1度くらい私みたいなフリルだらけの服とかを夢見るものだと思うけど。
「まるで私がそんな服を着たことがないとでも言いたげだな」
　ないでしょ。今日も真っ黒な服着てるし、喋り方も男勝りだしなぁ。
「まあ、わざとだからな。もっとも今じゃ板についたけど」

へぇ、その理由は？
「なんで言わなきゃいけんのだ。私も乙女だから秘密の一つや二つはあるってことだよ」
確かに。私は霊夢と魔理沙だったら怖いのは魔理沙だしね。
「それは私が霊夢より強いってことか？やっと私の強さに気づいたか！」
いや、普通に考えて人間で霊夢より強いっておかしいでしょ。女に強い人間他に見た事ないもん。
「なんだよ…じゃあなんだって私の方が怖いんだ？」
貴女が一番人間っぽいから。
「ますますわからん…」

「それで、なんで私のところに？最近話題だぞ、色んなやつがこいしと会ってるってな。少し前まではそんなこと聞かなかったけどな」
そうかな、あんまり意識してないけど。思い返してみればそうかも、無意識の制御が少しずつできてるからかなぁ。
「それは、良かったのか？おめでとう？」
うんうん、祝ってくれていいよ。
「あ、お前が書いた本読んだぜ。まさかそんな壮絶な過去があったなんてな」
信じてないでしょその言い方。まあフィクションなんだけどさ。
「当たり前だろ。なまじお前をモチーフにしたやつが本物だったとしても、姉役があまりにもかけ離れすぎてるぜ」
でもあのお姉ちゃんを小説に出しても、って思わない？
「それは超思う」
でしょー？まあお燐は信じちゃったけどね。
「おいおいマジかよ。主人への理解度が足りないんじゃないか？」
理解度が足りないのは果たしてどちらだろうね？外面だけとても

強そうで、家で泣いてるかもしれないじゃん。
「家で泣けるようならもう少しマシな性格してるぜ」
そりゃそうだ。
「話が逸れたな、私のところに来た理由だ」
うーん、無いね。なんとなくかなぁって。
「ま、そんなことだろうと思ったぜ。残念ながら客人をもてなす程の豪華なものは無いから我慢してくれよな」
いやいや、いっぱいお話出来たし私は結構満足してるよ。でもそうだなぁ…せっかくだから、1回だけ女の子っぽい喋り方してみてよ。
「はぁ？なんでまた…まあいいか。そうだなぁ…」
少し考えたあとに魔理沙は咳払いをした。

「今日はお越しいただきありがとうございます、またいらしてくださいね？」
にこり、と薄っぺらい笑いを貼り付けて掠れそうな声で鳴いた。
おー、とっても自然な仕草とお店の人みたいな挨拶。また遊びに来るね。

金髪の子かわいそう

この場所に名前はない。この場所は誰も知らない。この場所は誰にも見つからない。そんな嘘みたいな異界に私達は迷い込んだ…。
「そりゃ今作ったからね。何を詩的に語ってるんだか」
そんな夢のないことを言わないでも。今日は定期的に行われる妖怪達の会議。当然無作為に呼ばれるわけじゃなくて、お姉ちゃんとかレミリアとか、大きな勢力の上に立つ者が呼ばれる。
「いや、貴女を呼んだ覚えはないけれど」
隙間おばさんは無視。気を取り直してここにいるメンバーを紹介しよう。
紅魔館の主、レミリア・スカーレット。地霊殿の主にして地下の女王、私の最愛の姉、古明地さとり。
「さとりの扱いが私と比べて尊大過ぎない？」
お子様吸血鬼も無視。続いては天狗達の長、天魔さん。この人は初めて見るかな。それから隙間おばさんと手下の狐さん。
「雑！私の扱いが雑…待って今おばさんって言った？」
言ってないよ。うんうん、これで今回のノルマも達成。みんなのすばらしさが伝わったんじゃないかな？誰にかは知らないけど。
「こらこら、みんなを貴女のペースに巻き込んじゃダメでしょ。今日は大事な会議なんだから」
誰だろうこの人。猫をかぶるってこんなことになる？普通。もっとも家で見せるようなクズさを外に出すわけにもいかないか。
「ていうか、本当に呼んでないというか来てはいけないのだけれど？さとりもなんで連れてきたのよ」
「え、行きたいって言ったから…」
「え、そんな軽いノリで連れてきたの？もしかしてこの会議軽く見られてない？」
もはや威厳の欠片もなく狼狽える隙間おばさん。周りの妖怪はそ

の様子を見てそれぞれ笑ったり無関心だったり。
「いやぁしかしお前が出てくると聞いて驚いたけど、これが目的？私だって咲夜を置いてきているのに、それはずるいと思わない？」
「思いませんね。どうして？」
「この会議は従者の付き添いも禁止だ。だから天魔も私も単身でこの場にいるというのに」
　レミリアの言葉に天魔さんも頷く。
「ならば毎度狐の式神を連れてきている主催者から咎めるべきでは？」
「わ、私!?私はこの会議の提案者でしょ！」
「主催者が規則を守らない会議が成立すると思っているのですか？」
「それに藍にはいざと言う時に私の代わりを務めてもらう必要がある」
「ならば私も同じ。地霊殿にいるのは私とこいし以外にペットだけ。いざと言う時にはこいしに代わりを務めてもらわなければ、どうです？」
「ぐっ…」
　勝手に名前を使われてるけど、私はお姉ちゃんの代わりにはなれないのでなんとも複雑な気分。一方のレミリアは可笑しそうにくつくつと笑っている。
「いやぁ面白い。確かに咲夜では私の代わりにならないしフランドールには任せられない。一本取られたってやつだね」
「どいつもこいつも呑気に…。はぁ、もういいわ」
　ついには隙間おばさんが折れてこの問答は終わりを迎えた。お姉ちゃん顔に出てるよ、私に口で勝てるとでも思ったかって。

　会議というからにはもっとすごいものを想像してたんだけど、蓋を開ければ大したこと無かった。こう、人間の里を侵略したり幻想郷を支配したりみたいなのを想像したんだけどな。つまんないの。
「じゃあ、次の議題に…」

そうだ、イタズラしちゃお。
「そういえばこいしちゃんが見えないけど」
「あら、飽きてどこかに行っちゃったかしら」
「いやここさっき私が作った会議場だからどこか行くなんてありえな…なにこれ」
部屋の真ん中に黒電話。
「これは…こいしちゃんの？」
「まあ恐らく」
ジリリリリン。ジリリリリン。
「鳴ってるけど…」
「出てあげたらどうです？」
「嫌よ、なんで私が」
「この会議のまとめ役でしょう？進行の妨げを取り除くのも役目かと」
「貴女の妹でしょうが！はぁ、なんで私がこんなこと…」
「もしもし」
『私メリーさん。今貴女の近くにいるの』
「あのねこいしちゃん、お願いだから会議の邪魔だけはしないでくれる？ていうか飽きるくらいなら来なければよかったじゃない」
『えー、だって経験って大事でしょう？』
「はぁ…今回は許してあげるから次からは」
『私マエリベリー・ハーン。今どこにいるのかな』
「なっ!?なんでその名前を知って…!?」
『あはは。私、今
貴女のうしろにいるの」
その後聞こえた悲鳴で私は満足した。まるで少女の悲鳴みたい。おばさんなのに。

「このクソガキ！今日という今日は許さないんだから！」
「まあまあ八雲殿、童の悪戯なんぞに目くじらを立てるでない。くく

く、せっかくの美人が台無しだぞ？」
「うるさいわね！あんたも止めるの手伝いなさいよジジイ！」
「取り乱すなよ八雲紫。いつもの冷静さはどうした？」
「あんたも黙ってなさいクソガキその2！散々コケにしてくれちゃって！」
「貴女らしくないですよ？こいしの悪戯なんかに腰を抜かして」
「元々はあんたのせいでしょうが!!!」
いやー面白い面白い。楽しい会議になってよかったね隙間おばさん。
「良くないわよ！出禁！次から出禁だから！」
仲間はずれは良くないと思いまーす。
「何が仲間か！後からみっちり事情聴取するから覚悟しなさい！」
結局、その日の会議は解散になった。約1名を除いてみんな楽しそうだったから多分大成功。

「ところで、なんで八雲紫はあんなに狼狽えてたのかしら」
さあ？この前会った外来人の名前を言っただけなんだけど。
「…ふーん？」

妹ーーーーク

「最近うちに来ること多いんじゃない？」
　またまた遊びに来た紅魔館。フランに言われて確かにと思う。特に理由はないけれど、もしかしたら無意識的に遊びに来ているのかも。ということは私が思っている以上にフランのことを求めているということになり…うーん、複雑。
「複雑って何よ。私的には大歓迎だけど」
　わかってないなぁ、私は求められたいの。私をある意味病的なまでに好きなフランに愛されている自分が大好きでたまらないというか。
「とんでもないクズ発言が飛び出したわね。まぁ別にこいしがクズだろうがどうでもいいんだけど」
　普段人に見られる事も気にとめられることもないからね、その分私を見てくれる人のことも見られてる自分も特別に思えちゃうんだよね。
「貴女の場合あまりシャレになってない言葉だから反応に困るわ。何より笑顔でそれを話すからタチが悪い」
　フランも私と似たような…とは言わないけどかなり重たい内情を持ってると思うよ。
「変に気を使われる方が嫌だわ。今はそれほど不自由してないもの、普通に接して欲しいのに」
　つまりそういうことよ。私たちみたいなおおよそ人に言えないものを抱え込んだキャラはそうやって他の子と同じように接してもらう方が楽ってこと。
「そっか、まあ普段からあんまり気を使ってないけどね」
　それがわかってるからこっちも居心地がいいってものよね。でも貴女の愛は少し重すぎる気もする。
「体重以外全部重い女みたいに言わないでよ。そりゃあ今まで普通に接してもらえなかったから、せっかくできた友達は大切にするわよ」

その大切にするって言うのは館に入った瞬間にセンサーの反応が如く飛び込んでくるのも含まれてるの？
「当然、友人の来訪に気づけないなんて失格だわ」
うーん、前回の件でフランをまたひとつ強化してしまったかもしれない。そのうち館の半径何キロ以内とかに入るとわかったりするようになるのかな。
「ゆくゆくはどこにいるかいつでもわかるようにしたいわね」
不可能がなさそうなのが怖いところだね。

「でも、最近は薄れてきてるんじゃない？その無意識とか言うやつ」
みんなから言われるねぇ。なんでかな？
「こいしがわからなかったら私にもわからないわよ。でも言ってたじゃない、煙草吸い出したら無意識を制御できるようになったって」
完全にじゃないと思うけどね。でも制御できてるんならみんなに見えたり見えなかったりするもんだと思うけど。
「そりゃあ、見てもらえないのが嫌だったんじゃないの？だから今こうして人に見えるように無意識を薄くしてる」
そうなのかな？
「そっちも無意識なのかもね。どっちにしても無意識の妖怪って肩書きはしばらくそのままね」
詳しいね。古明地こいし博士の称号をあげちゃおう。
「あら嬉しい。でも、私ですらわかってるんだからさとりさんとかもとっくに気づいてるんじゃない？」
えー、そんな話されなかったけどなぁ。それとも、わざとしなかったのかな。
「こういう身内の変化って案外鋭く見られるもんよ？うちのお姉様も私なんか放置してたくせにやたらと目敏くて鬱陶しいんだもの」
愛されてるってことじゃん。フランは追いかけたいタイプだし、追いかけっこになってるのかもよ。
「ふん、別に追いかけてないもん」

はいはいツンデレちゃんね。そろそろ帰ろうかなー。
「えー、もう帰っちゃうの？もっとお喋りしようよ」
また今度来るからさ。そろそろ話すこともないし。
「そんなことないよ！それに、今外雨降ってるよ？」
え、こんなところからわかるわけ？
「うん、なんとなくだけど雨が降ってる時はわかるんだ。吸血鬼特有の何かかもしれないけど」
参ったなぁ、雨の中帰るのもアレだし…。
「どうする？今日は泊まってく？」
人の不幸を喜ばないでよ、もう。でもそうだなぁ、何もしないって約束するなら泊まっていこうかな。
「やったー！もちろん約束するわ！で、どこまでが『何もしてない』になる？」
やっぱり帰るね。

宇佐見菫子の悪夢

私は夢を見る。きっと人に話したら笑われるような突拍子もない夢。女の子達が自分は妖怪だとかなんかとか言って、ビームを放ってくるとかなんとか。

でも私はこの場所を知っている。知っているから夢じゃないと思える。それすらも夢だと言われたら否定できないけど…まあその時はいよいよ私の精神が参ってしまっているということなので私自身どうしようもないと思う。

「どうしたの？黙っちゃって」

「え？あ、あぁ…なんでもないわ」

私の夢には妖怪がはびこっている。だから出歩く時は誰かと一緒に、だ。とはいえ今私を守ってくれてる子も妖怪なんだけど…。

「ねぇ、それよりも本当に地獄に行くの？私死なない？」

「大丈夫だよ、運が良ければ死なないから」

「それめちゃくちゃ危険よね!?」

その護衛役に殺されそうになっている今現在。普通なら地獄なんて名前のところ行きたくもないけど、結局のところ私は好奇心に負けて首を縦に振ったのだ。

「でもいいところだよ、地獄」

「そりゃ貴女は妖怪だからね」

「きっと菫子も気に入るよ。いざとなったら私が助けてあげるからさ」

まあ実際助けて貰ったこともあるから信用はするけど…。なんかこの子怖いのよね。なんていうか、得体が知れないっていうか、例えるなら1秒前まで満面の笑みで話してたのに急に真顔になって飽きたとか言い出すような、そんな怖さ。

「信用されてないなぁ、私」

「あー、貴女心が読める妖怪だっけ？」

「いや私は無理、お姉ちゃんだけだね。でもその疑わしい目をしてたら誰でも気づくと思うよ？」
「そんな顔してたかしら」
「してた」
の割には特に気にしてる風でもないのよね。そこが怖いっての。
人間…いや、知性を持った生物の最大の武器は『知っている』ということだ。知っていれば準備ができる、対策ができる、落ち着いて対処ができる。だからこそ、正体不明（しらないもの）を恐れる。だからこそ、私はこの少女が怖かった。
「私が怖いの？」
本当は心が読めるんじゃないか、と疑うほどに鋭いこいし。この心を見透かされたような言動もやっぱり怖い。
「だって、目の前に食べ物が置かれたら目隠しされても匂いでわかるでしょ？」
私を食べる気かよ。

「着いたよ。ここが地底、もとい地獄の入口」
「ただの穴に見えるけど…」
穴と言うよりは洞窟。大穴がまるで私を飲み込もうとしているかのように見えた。試しに石ころを投げ入れてみても、一度壁にぶつかってその後は音が帰ってくることは無かった。
「この穴、すごい深いわよ？どうやって入るのよ」
「そりゃもちろん降りるよ。ここ以外に入口はないし」
「お迎えのゴンドラでも来てくれるのかしら」
「いや、普通に」
言い終えると同時にこいしは私の腕を掴んで大穴に飛び込んだ。

…ん？飛び込んだ？飛び込んだんだけど!?
「へ？えええええええええええ!?!?」
「1名様ごあんなーい！」

妖怪どころか死神だった。無力な私は無残にも逆らうことが出来ず天国…いや、地獄への片道切符を渡され特急列車で向かっている。
「ちょっと!!このままじゃ死んじゃう!!着地できるんでしょうね?!」
「たのしーねー!あ、喋りすぎると舌噛んじゃうよ?」
そんな場合じゃない!と言いたいところだが直前の言葉が気になって口を開けない。
と、そこに私の住んでる世界ではおよそ見られないであろう蜘蛛の巣が下に見えた。なるほど、あれがクッションになってくれるのね。
「ちょっと通るよ、ごめんねー」
ところがこいしはどこから取り出したのか、片手で持てるほどの包丁で蜘蛛の巣を切り裂いた。
いや何してくれてんの!?
「なんだか非難の目を感じるんだけど」
そりゃそうよ!でも舌噛むのは嫌だから喋らないけど!これで下に落ちて妖怪しか生き残れないみたいなオチは絶対に嫌だからね!
ていうか地面見えてきた!ねぇ地面が見える!地面が見えるってことはおよそ何もクッション的なものがないってことよねぇ!?
私の超能力はあくまで力を加えるだけで、力学的な法則には逆らえない。つまりこんなに下方への力のかかった状況では浮遊することが出来ない。ああ、終わった。
「きゃー!落ちるー!」
こいつは妖怪だからって楽しんで!ああもう涙が出てきた、これは目が乾いたからか死への恐怖からか…。
あ、もうダメ死ぬさよならお父さんお母さん先立つ不幸をお許し…と、ここで私は柔らかい伸縮性のあるものに支えられ弾き飛ばされた。

いやどのみち岩壁にぶつか…らない。誰かが私のことをキャッチしてくれた。
「こいしちゃ~ん。頼むから普通に糸に引っかかってくれないかな?こっちから迎えに行くからさぁ」

「えー、こっちの方が楽しいのに」
「蜘蛛の巣を治すのも大変なんだよ？それに毎回落ちてくる度にげんなりした仲間の声を聞いて下で待機する身にもなって欲しいなぁ」
お友達…かな？どうにか私は助かったらしい。

こいしちゃんのちょっとイイトコ見てみたい

地獄というから、辺りは火の海マグマの川、なんてのを想像してたけど…。実際のところ岩ばっかり、薄暗くてそれこそ入口で抱いた洞窟みたいなんて感想は全然間違ってなかった。
「やっぱり人間なんだ、この子。こいしちゃんのお友達？」
「うん！普段は外の世界に住んでるんだってさ。今日は地獄を見に行きたいって言ってたから連れてきたの！」
「いや言ってないわよ!?勝手に連れてきたんでしょうが！」
嘘だ。私の好奇心が勝ったのも事実だし実際無理矢理にでも振り切ることは出来たはずだ。だけど土蜘蛛のヤマメは笑って私の肩を叩いた。
「いやぁ苦労してるねぇ。こいしちゃんに振り回されてんだろ？ま、諦めて地獄めぐりのツアーを楽しもうよ」
これ、俗に言うツンデレってやつなんじゃ…。
「んじゃ、楽しんできなよ！」
地獄を楽しむ、というのもなかなかにおかしなものだ。

暫く歩いていると賑やかな声と街明かりが見えた。もう地獄どころか普通の都市ですよこれ。
と、突如岩の塊が私たちの方へ飛んできた。今日は厄日ね…。
「とうっ！」
護衛役は一応こなしてくれるらしく、飛んできた岩山に向かって空中回し蹴りを御見舞するこいし。しかしその岩山は「ぎゃっ！」という悲鳴とともに地面に撃墜された。
「何しやがる！」
「およ？岩かと思ったら鬼さんだった。ごめんね、間違えちゃった」
「あぁ!?てめぇは古明地ンとこの…チッ！悪ぃな世話かけちまった」

悪態をついてるのか謝ってるのかわからん。というか怖すぎてさっきから震えが止まらない。
「あ?おいなんでこんなとこに人間がいるんだ?」
「ひっ!」
「あー!私の友達泣かしたー!いけないんだぁ女の子泣かしたら」
こいしは頬を膨らませるが正直全く怖くない。お願いだからこういう時くらいはキリッとした顔で私の前に出て欲しい。
「フン!変なことしでかすんじゃあねぇぞ」
「わかってるよーだ。ところでなんで吹っ飛んできたの?喧嘩?」
「喧嘩、というより催しだな。姐さんから盃奪ったら1ヶ月好き勝手やっていいってよ」
すると珍しくこいしが呆れた顔でため息をついた。
「えー…そんなこと言ってまたお姉ちゃんに怒られるよ?」
「姐さんが負けるわけねえだろうが。まあ、挑むやつも負けるつもりで挑んでるわけじゃねえがな」
なにそれ…。中身は文字通り地獄だったのかもしれない。
「ふーん…私も参加していい?」
「はぁ?何言ってんだお前…ま、いいんじゃねぇの?姐さんも来るものは拒まないだろうしな。死んでも文句言うなよ?」
「わかってまーす」
え?なんか変な流れになってない?これ私もついて行かなきゃ行けないやつよね?流れ的に。ていうかこれ鬼がわんさかいる感じよね?まずくない?この鬼1匹に既に震えてるんですけど?
「じゃあ行こっか!」
嫌だ。とは言えない雰囲気だった。

「さぁ次はどいつだ!?遠慮はいらないよ!」
「はーい!私やりまーす!」
私の手を引いて鬼の群れに突っ込むこいし。本当に空気が読めなさすぎるし私の胃の痛みがさっきから増していく。

鬼ではないこいしと人間の乱入によって辺りはざわつき始める。
「おや、こいしちゃんじゃないか。そっちの人間はお友達かい？」
「うん、そうだよ。だから食べないでね？」
「私は食べないけど、他の奴らの保証までは出来ないねぇ。まぁ、ここに連れてきたんならそれなりにやれる子なんだろ？一緒に挑戦するのかい？」
「うーん、私一人かな。菫子は震えちゃってるし」
誰のせいだと思って。
「ルールは…まあ、端的に言えば無いよ。全力で奪いに来な！」
「よーし、カッコイイとこ見せちゃうぞー！」
周りの鬼達はあまり良く思ってないらしく（こいし自身も自分のことを地底でも嫌われ者の部類と評していた）、嘲るように疑いの目を向ける者も多かった。具体的には「あんな奴が姐さんの相手になるかよ」と嘲笑するような鬼もいた。私はなんだか悔しくなって、思わずこいしに向かって叫んだ。
「こいしー！1発かましてやりなさーい！」
こいしは少し驚いたあと、にへら、と顔を緩めた。

こいしの動きは子供の見た目には似つかわしくないほど俊敏で、それでいて凄まじい勢いだった。だけどそれ以上に鬼の方の動きには無駄がなく、こいしの攻撃を常にいなし続けていた。
「本気でやってくれないの？」
「お前を怪我させたらさとりのやつから因縁つけられるからね。悪く思わないでよ」
こいしは余裕で攻撃を受け切られているのが不満そうだった。まあ誰だってそうか、私が当然のようにテストで満点を取っていても名前も知らない誰かの不興を買うことはざらにあったし。
「それっ」
と、こいしが鬼の角に帽子を引っ掛けて視界を塞ぐ。鬼の動きが一瞬止まり、その隙にこいしが包丁で盃を持った手を切り落とそうとする。思わずグロテスクな想像をしてしまい気分が悪くなった。

「おおっと!」
「きゃっ!」
鬼の方も本気を出したのか、今までとは明らかに違うスピードで体をひねってこいしを地面に押さえ込んだ。地面に勢いよく叩きつけられたこいしが心配になり思わず奥の方をのぞき込んだが、元気そうに足をじたばたさせていた。
「や~ん」
「危ない危ない。やるねぇこいしちゃん、でもこれで負けだよ」
こいしはまだ負けてないと言いたげにもがいていたが、暫くすると疲れたのかピタリと止まった。
最初は人間の私の方をジロジロ見てきた鬼達も、試合が始まるとまるで最初から私などいなかったかのように試合に熱中していた。初めはこいしを侮って嘲笑していた鬼も、試合が終わると声援を送っていた。ふふん、どんなもんですか私の友達は。
「あーあ、せっかくカッコイイところ見せようと思ったのになー」
こいしは不服そうだったが、私の心は満たされた気分だった。

小話：不幸なサトリ妖怪

「いい勝負だったじゃない。やっぱりこいしって強い妖怪なのね」
なんで菫子が嬉しそうなのかは知らないけど、まあ弱い妖怪じゃないと思うよ。現に地底ではそんなに喧嘩売られることもないし…いやまぁ地底にはそもそも格上に平気で喧嘩売るやつばっかりで宛にならないけどね。
「やっぱりこう、強いキャラってのは力の誇示をしない方が強く見えるわよね。飄々としててここぞって時にね！」
すっごいテンション高いね。まあでも、本当に強い人はその事実だけで満足できるものよ。これはお姉ちゃんの言葉だけどね。
「あーたしかに。能ある鷹は爪を隠すけれど、優秀であればそこに価値があるって考えればわざわざ人に見せ付ける必要が無いもの」
自己顕示欲って言うのは常に余裕のない人が持ってるものだからね。
「あなたみたいな小さい子が深いことを言うと年季の差を嫌でも感じるわね。ロリババア？的な？」
悪口にしか聞こえないよそれ。
「それくらい思わないと、歩き煙草をしてる幼女なんて見てられないもの」
別に良いでしょこれくらい。いい加減慣れて欲しいなぁ。
でも昔は私も弱々しい妖怪だったけどね。
「本当に？生まれながらに強い妖怪は強いってイメージだけどなぁ」
そんなことないよ。生きた年月が長ければ長いほど妖怪は強くなる。ま、吸血鬼みたいに種として強い妖怪やお姉ちゃんみたいに弱い種族なのにとんでもなく強い妖怪もいるけどね。
「へぇ、あなたのお姉ちゃんは強いんだ？」
強いよ。お姉ちゃんが負けたの、見たことないもん。
「だからこいしも強いの？」

それはどうかな。でもサトリ妖怪の中では結構強い方だと思うよ。

むかしむかしある所に幼子の姉妹がいました。不幸なことに、彼女たちは人の心が読めてしまいました。心の弱かった妹はいつも姉に守られてばかりで、そのうち人の心を読むことに疲れて辞めてしまいました。それからというもの、世の中の全てのものが気にならなくなった妹は強い妖怪になりました。彼女がそれを望んでいたのかはもうわかりません。

「…それって貴女達姉妹の話？」

さあね？でも妖怪の強さは精神の強さなんだ。強い妖怪は強いと思ってるから強い。妖怪の思い込みの力は人間のとまるで違うのよ。

「ふぅん」

案外あなたも例外じゃないかもよ？人間にしては精神が妖怪寄り。

「えぇ、そんな訳ないでしょ。どこがよ」

夢の中で違う世界に行くことが出来ると思い込んでるところとか、超能力が使えると思い混んでるところとかね。

宇佐見菫子とコミュ障ＫＹお姉ちゃん

結局街には行かず（妖怪だらけだからね）、そのままこいしの家に行くことになった。途中誰かと揉めていたようだが無事に橋をふさいでいた人を説得して通してもらえたみたい。ものすごい視線を感じたけどね。

で、やっとのことでこいしの家に着いたんだけど…。

「ようこそ！ここが私の家、地霊殿だよ」

でっっっっっか。でかすぎ。人が住むための家とは思えないくらい大きい。

「あー、うちはペットたくさん飼ってるからね」

いやそんな次元じゃないんですけど!?え、本当に？本当にこれだけ大きな家のほとんどをペットが占領してるの？動物園かよ。

「あ、もしかして動物嫌いだった？」

いや、むしろ好きだけど…。

「じゃあ大丈夫！入って入って！」

頼むから少しくらいは頭を整理させる時間を与えて欲しいな。

（あ、こいし様だ）

（人間？）（人間がいる）（人間だ！）

（なんで人間と一緒にいるんだ？）（なぁ、あれ食ってもいいかな？）

（馬鹿、こいし様のご友人に決まってるだろ）（あのこいし様が？）

（えーホントかなぁ）（でも楽しそうに喋ってる）

「ただいまー！」

「お、お邪魔します…」

すっごいジロジロ見られる。ペットから明らかに意志を持った視線を投げかけられてますよ。

（あ、あいつ媚に行きやがったぞ！）（抜けがけだ！）

（お菓子貰えるかな？）（さぁ？）

おお、猫ちゃんが私の元に…。人懐っこいペットは可愛いなぁ、よしよし私は何も持ってないけど撫でてやろう。あ、毛並み綺麗だ…。やっぱり手入れしてる人がいるってことよね。
「みんなお姉ちゃんのところに気が向いたら行って毛繕いしてもらってるし、結構自由だよ」
へぇ、こいしのお姉ちゃんって優しいのね。
「お姉ちゃんが?まっさか〜!あそこまで性格の終わってる生き物もいないと思うよ」
生き物単位で!?いや会うのが怖くなってきたんだけど。
「だいじょーぶ!ねぇ、誰かお姉ちゃんの居場所知らない?」
こいしが聞くと集まっていた中の1匹(鳥かな?)が人型になった。あまりの出来事に脳の処理が追いつかない。
「さとり様ならお部屋にいらっしゃいます」
「ありがとー!それじゃ行こっか」
まだ脳の整理が出来てない。と、こいしについていく私を呼び止める鳥。
「人間、さとり様は口下手だが恐らくきっと多分…希望的観測に等しいが悪気はない。どうか気を悪くしないでくれ」
ええ…。

「おねーちゃん!お友達連れてきたー!」
「と、友達?こいしが?」
ドアを開け放った先にいたのはこいしと同じくらいの背丈の女の子だった。紫と桃の中間のような色の髪を適当に整えている、こいしのセミロングとはまた違った風でまとっている雰囲気も異なる。見た目にそぐわず落ち着いた年長者のような振る舞いだった。
「ふふ、若い子から見たら私も御年寄ですね」
あぁーっと!そうだこっち心が読めるんだった!不味い下手なこと考えたら殺されるとりあえず思考をなんとかして上書きして…。
「そんなに焦らなくてもいいですよ?それに何を考えたところで人間の深層心理は常に上部の思考とは異なり無意識に考えてしまうもの、

誤魔化しても無駄ですよ」
　あぁ…ならもういいか。なんかさっきからこいしは変な顔してるし。
「お姉ちゃん、猫被ってる」
「当然でしょ？客人の前で普段と同じ振る舞いをするわけもなし、よ」
「ふーん」
　何が不満なんだろう。それに口下手とか言われたけど、まぁ思ったことをすぐ口にする程度っぽいしそんなに心配することでもない気がする。
「もう、あの子ったらそんなことを。ペットに心配されるようじゃ私も落ちぶれたものですね」
　あ、やば。なるべく考えないようにしてたのに。でもあの子が怒られるのならそれは心外だ。
「あの…」
「ああ、言わなくても結構。そんなことで怒ったりしませんよ。みんないい子ですから、悪意がないことくらいわかります」
　なら良いんだけど。しかしアレだな、こっちの思ってることを口に出すもんだから会話いらずというかなんというか。却って会話のテンポが悪い気もする。
「これはまぁ、癖みたいなものなので気にしないでください」
　いや気になるわ！はぁ～めんどくせ、みたいな顔するな！こいしの言ってた事がようやくわかったわよ。こいしも嬉しそうにしない！
「賑やかね、貴方のお友達は」
「でしょー！結構飽きないんだ、菫子といると」
　褒められてる…訳では無いわねこれは。
「でもせっかく来てくれたのだから、私も話が聞きたいわ」
　私の事？聞いても特に面白くないと思うけど。
「それを決めるのは私です」
　はぁ…。

そこからは質問攻めだった。文字通り質問攻めで、私が答える前にさとりが勝手に喋るからだ。
「外の世界ではどんな暮らしを？へぇ、寺子屋の何倍も大きい学び舎に通うのですか。優秀なあなたにはさぞ窮屈でしょうに」
「どうやって幻想郷を行き来してるのかしら？夢の中を？なら今あなたは外の世界では寝ているのですね、結構危ない状態よそれ」
「こっちでは何を…とは、聞くまでもないですね。こいしと似たようなことをしているのでしょう」
事情聴取とか任せたら1発で犯罪が見抜けるわね。幻想郷に法律なんてないけど。
「ふむ…。思うに、貴女の幻想郷旅行は貴女の記憶として存在する。つまりは貴女が望むだけ長くこちらに居ても外の世界では目覚まし時計とともに起きる。何故ならそれは起きた後に幻想郷に居た記憶が頭に残るから」
…何が言いたいのかわからない。
「私の推測ですが、貴女がこちら側に来ている時外の世界の時間は進んでいない。それは幻想郷が外と隔絶され時間軸が異なるから。だけど人間の記憶容量というのは決まっています。こちら側にリンクしすぎた貴女はいずれ目を覚まさなくなる。それだけの記憶時間が貴女に必要となるから」
ちょっと、怖いこと言わないでよ。こいしもさっきからずっと黙ってるし。
「いやー、お姉ちゃんが誰かと話してるのが新鮮でずっと観察しちゃった。まあでも、その時になったら幻想郷に住めばいいんじゃない？」
いや気楽に言ってくれるな！そう簡単に割り切れるわけないでしょ！
「とはいえ、いまの貴女はこちらに魂が来るのを制御できてない様子。今すぐに死ぬってわけじゃないんですし、もう少し気楽に構えていいと思いますよ」
そんな話された後で気楽にいれるかい！どうすればいいのよ！

「まぁ、直接貴女が幻想郷に来ればいいんじゃないですか？そうすれば少なからず貴女の体に時間が溜まることは無いでしょう。多分ね」
　でも寝てる時間は制御できないし…うぅ～！
「悩んでも無駄なこともあるんですよ。楽しく生きていきましょうよ」
　人間はすぐ死ぬんですー。そんな楽観的にいられるかい。はぁ…動物に癒されて来たい。
「でしたら、ご自由に。この館の至る所にペット達がいますから、乱暴しなければ自由に触れ合ってきていいですよ」
　本当!?早速行ってきます！やったー！動物に囲まれるって1回体験してみたかったのよね。

「行っちゃったね。さっきはあんなに悩んでたのに」
「切り替えができるのはいい事じゃない。悩んでるよりマシよ」
「でも驚いたよ。お姉ちゃんがあんなに優しくするなんてどうしたの？別人？」
「酷いことを言うじゃない。サンプルケースとしてはレアなんだから、行く末を見届けたいだけよ」
「そういうとこだよ」

宇佐見菫子はまだ悪夢を見る

何故かゆで卵の殻を剥いている。お母さん、私は地獄に来てゆで卵の殻を剥いていますよ。もう意味がわからない。
「宇佐美さん、地獄にだって誰かがいるのですから。ゆで卵があってもおかしくありませんよ」
さとりさん、私の心を覗かないでください。癖？あ、癖ですかそうですか。それなら仕方ありませんねとでも言うと思ったかおいコラ。何を笑ってんだ説明をしなさいよ説明を。
「せっかくこいしがお友達を連れてきたんだから、おもてなしをしないとでしょ？でもせっかくだから一緒に作った方がいい思い出になるかと思って」
絶対嘘でしょ。さっきこいしが『今日はお燐とお空いないってさ』って言った時の貴女の顔と、こっちを向いた時のまるで思いついたかのような表情で大体察してるわよ。
「いえいえ、まさか貴女が丁度よく居たから人手に使おうだなんて思ってないですよ。何せお客様ですからね」
はぁ…ま、いいけどね。やることがあるわけじゃないし。お、いい笑顔だな腹黒幼女。
しかしアレだ、幼女ふたりと一緒に料理をするなんて姉っぽくてなかなかいいじゃない。こんな番組があったようななかったような。
「それにしても、貴方の超能力ってとっても便利ね」
内側から超能力で押し出してゆで卵の殻を剥いてる私にそれ言う？馬鹿にしてたりしない？あ、してないそうですか。と、隣のこいしを見ると死んだ目で潰れた自分のゆで卵を見つめていた。
「殺さないで…」
いやそんなことで死刑になるか！なんでそんな大袈裟なのよ！
「しょうがないわねぇ。今回だけよ？」
え、嘘よね？この家ってゆで卵ごときでそんなに重い罪になるの？

そんな殺伐とした世界でこいしは生きてきたの？
「ふふ、冗談ですよ。貴女の反応が面白くてつい、ね」
だ、だよね…。ていうか、何も聞かされずにゆで卵作ってるけど何に使うの？
「…煮物だけど？」
キョトンとした顔で答えられた。ああ、知ってる料理でよかった。

ふう、お腹いっぱい。こっちではカロリーとっても平気だからついつい美味しいものを食べすぎちゃうのよね。
休みたいと言ったら個室を与えられたけど、本当にひろい家。こんな部屋がいくつもあったりするのかな。
しかし、なんというかとても無機質な部屋だ。ベッドはある、机もある、椅子もある。棚もあって普通の部屋といえばその通りなんだけど、なんというか普通すぎる。少なからず生活感のある部屋なのに、使用者の特徴が全くと言っていいほど出ていない。私の部屋だって私のお気に入りのものが置いてあったりするものなのに。
色んなものがあるのに、何も無い部屋。薄ら寒さをも感じるほど不気味だった。
「ただいまー！」
突如こいしが部屋に突撃してきた。もう家に帰ってきてるのにただいまとはどういう思考してるんだ。
「え、ここ私の部屋だもん。ただいまだよ」
え、そうなの？まあ誰かしらが使ってる気はしたけど、まさかこいしだったとは。しかしこうも無味なもんかね、結構女の子っぽいと思ったんだけど。
「うーん、私あんまり部屋にいないからなぁ。家に帰ってきて寝る時と、着替えの時くらいにしか使わないよ？家にいても、自分の部屋にいることはほとんどないなぁ」
なるほどそれで。まぁこれだけ広いと色んな所回ったりするもの

ね。さとりさんもそんな感じの部屋なのかな。
「お姉ちゃんは仕事部屋にしてるから色々置いてるよ。置きすぎて部屋の半分くらいしか足場ないけどね」
仕事かぁ。そうか、地獄のお偉いさんだもんね。あんな小さい子が仕事…ううん、なかなかにショッキング。
「まあショッキングだね、書類の山を目にした時のお姉ちゃんほど悲惨なものは無いよ」
ひょえぇ。まあ私よりもよっぽど長く生きてるんだものね…。ってアレ？こいし？おーい、寝てない？
「うーん…？ふあぁ、眠いかも。ぐぅ」
せめてベッドで寝なさい！私にもたれ掛かるな！あーもう、ほらすぐそこにあるでしょ。
案外無理してたりしたのかしら。これでも結構私に気を使ってくれたり？ていうか私も沢山歩いたしなんだか眠く…今まで幻想郷でこんなことなんてなかったのに…。

ぎぃぃ。
ドアの開く音で目が覚める。ここは私の部屋…じゃないわね。こいしの部屋だ。ていうことはこいしが出てったのかしら。そう重い顔を上げるとそこに立っていたのはこいしのようでシルエットが違う。帽子を脱いでいても髪型が違えばわかる。
「起こしてしまいましたか」
さとりだ。ううん、本当はここら辺で目が覚めて夢から現実に戻る頃なんだけど今回は長いみたい。
「そうですか…」
さとりはどうしてここに？仕事が大変って聞いたけど。
「しばらくは落ち着いてますよ。それよりもこいしと貴女のことが心配で見に来ただけです」
なるほど、こいしの部屋からしばらく出てこなかったからかな。心配してくれたのならありがとう。でも――――――。

「嘘だ、と？貴女は私のこともこいしのことも随分怖がってるようです。疑いすぎではありませんか？」
　そうだ、私は貴女が…貴女達が怖い。それはとても感覚的なものだけど。
「それは、単純に親睦が浅いからでしょう。人は誰でも面識のない人間を警戒しますからね」
　そう言ってにこりと笑うさとり。
　寒い。寒い寒い寒い背筋が凍るほど寒気がする。なぜこいしが怖いのかわかったつもりでいたが前に考えた論理的な嫌悪感は間違いだったことに今気づいた。現に今私の心を読んでいるはずのさとりはひとつも表情を変えずにニコニコしている。
「これでも長く生きてますから。嫌悪感を示された程度で喧嘩腰になるほど短気じゃありませんよ」
　そうじゃない。そうじゃないんだ、私の恐怖は報復の恐れから来るものじゃない。こいしが、さとりが、私に語りかける時にその目は笑っていない。私はそれが怖かった。
「目が…？自分の目は見えないけれど、そんなに表情筋が固いかしら」
　違う。その目は私に向けられた感情だ。いや、人間の私に、と言った方が正確だ。私に向けられているその感情の名前は、諦念と疑惑だ。
「傷ついちゃうわ、そんなに言わなくてもいいのに」
　こいしは幾分かマシだったけど、貴女のソレは比にならないほど私を刺す。人間への底知れないほどの悪意が私には感じられる。
「…悪意、とは別物。私達はただ、この生きてきた道の中で人間と相容れなかっただけ。貴女が悪いわけじゃないわ」
　…私が謝ることじゃない。それでも、せめて私はこいしと友達でいたい。貴女が信じなくても、こいしが信じなくても、私の中だけでもいい。
　さとりはちょっと驚いたように目を丸くした。それまでの私を疑う目が薄れた気がする。
「ここまで来る人間って変わってるのよね。ええ、貴女が友達でいた

いと言うなら私は別に構いません。こいしが認めれば私も認めますから」
　ええ、勝手にそうさせてもらうわ。あの鬼の催しの時に見せた笑顔、私は信じてるからね。
　おっと、目眩がしてきた。今回はここまでかな。なんだかんだ楽しかったわ、ありがとうさとり、こいし。
「待って」
　目を覚まそうとする私の肩を掴み私の顔を覗き込むさとり。近い近い近…ッ!?目が笑ってる。笑ってるけどこれは温かいものじゃないな。イタズラをしに来た子供の顔みたい。
「こいしに友達ができるのは私も嬉しいの。ねぇ、貴女もうここに住まない？精神体の貴女なら歳もとらないだろうし、貴女の好きなオカルトもいっぱいあるし、住まいもここを頼ればいいわ。幻想郷は全てを受け入れてくれる、当然貴女のこともね」
　甘い声。誘惑。この誘惑に負ければきっと私は戻れない。そしてそれをわかってさとりは私にイタズラをしているのだ。このイタズラは悪意も善意もない。ただの子供遊び、子供の悪ふざけに過ぎない。ただ一つ、私の命がかかっていることを除けばね！
「せっかくだけど遠慮させてもらうわ！まだやり残したことたくさんあるからね！」
　うん、これでいい。また会いに来ればいい。だから今は――――――。

「残念」

「ぶはっ！」
　何故か息が詰まっていたような感覚。元の世界に戻れたっぽい。ジリリリとうるさい目覚ましをとめ、顔を洗いに行く。
「あ、クマ…」
　洗面器の上の鏡に映る私の顔。目の下にはクマが出来ていた。

クリスマスｉｎ地霊殿

メリークリスマス！地底にサンタがやってくる～！
「こいし、落ち着きなさい。何をそんなに喜んでるか知らないけどとりあえず部屋で暴れるのをやめて」
ええ～つまんないの。知らないの？クリスマス。
「知ってるわよ。西洋の祝日で誰だかの誕生日でしょ？それをどうして貴女が喜んでることに繋がるのよ」
やっぱり知らないんだ！クリスマスは偉い人の誕生日にかこつけて豪華な料理を食べたり人とプレゼントを交換したりするんだよ。
「そうだったの？詳しいのね」
フランが教えてくれたんだ！だからウチでもクリスマス、豪華な料理でお祭りしようよ。
「まぁ…別にいいけど、紅魔館の催しには行かなくてよかったの？」
私はお姉ちゃん達とお祝いしたいの。フランには悪いけど、こっちの方が落ち着くからね。
「そこまで言われちゃ動かない訳には行かないわね。お燐たちを呼んできてくれる？」
はーい！

地底にも雪が降る。なんで？とたまに思うけれど、雪が降るからという結論にしかならない。この世界には『そういうもの』が溢れてる。賢い人は納得する、幼い子は文句を言って喚くけれど喚くだけ。私は…私はどっちだろう。
「どうしたんですか？こいし様」
お燐に心配されたかな、変な顔してたかも。ううん、なんでもないよ。…お燐はさ、なんでクリスマスで私たちがお祝いするんだと思う？

「え？えー…そう言われてみればなんででしょうね」
私も答え知らないからさ、お燐の考えを聞かせてよ。
「うーん…私たちが楽しいからじゃないですか？」
苦笑混じりにお燐は答えた。ああ、そっか。そういう考えもあるよね。確かに、楽しいのはいいことだもんね。
「ちなみにこいし様はなんでだと思うんですか？」
わからないから聞いたのよ。でも、欲しかったものが少し貰えたかも。
「えっと…よくわからないですけど、お役に立てたなら何よりです」
うんうん、ありがとうね。それで、今日の豪華な夜ご飯は何？
「えー、それ聞いちゃうんですか？せっかく秘密にしようと思ったのに」
だって気になるじゃん！でも私でも当てられるよ。鶏肉の丸焼きでしょ！
「言い方…ろーすとちきん、ってやつですよ。さとり様の書庫にレシピ本があったので作ってみようかと」
あー、あれね。お姉ちゃんがこうやってお燐の作れる料理を増やすために置いてあるんだよね。そのくせ何も言わないんだから。
「まあ、さとり様はあんまり料理しませんもんね。別に嫌じゃないですし、私が気づかなかったら直接言われてたでしょうし」
図々しいことこの上なしだね。それともこれくらいが当たり前なのかな？レミリアもわがままだしね～。
「そのぶんお世話になってますからね、もう少し自分の体に気を使っていただけるといいのですが…」
あー、まあちょっとやそっとじゃ死なんでしょ。むしろあれだけの外道が他人に心配されるなんて幸せ過ぎるよ。
「あはは…ま、人になんと言われようと私の恩人であることに変わりはありませんから」
眩しい。眩しすぎて失明しちゃう。お姉ちゃんの目も潰れちゃうからそれは本人の前では隠しておいてね。
「…？あ、そうだ。クリスマスのことは知ってるんですけど、メリーク

リスマスってどういう意味ですか?クリスマスの合言葉みたいなもんだとは思ってるんですけど」
あ、知らないんだ。特別に教えてあげようじゃないか、フランに教わった私が偉そうにしても仕方ないんだけどね。えっとね、ごによごによごによ…。

その夜、食卓にはいつも見ないような大きな鶏肉や綺麗に彩られたサラダやシチューといった豪華な料理が並んだ。お姉ちゃんの提案で人型になれるなれない関係なしに、地霊殿に住むペットをエントランスホールに集めての大パーティだった。とっても広いエントランスホールだけど、さすがにペット全員だとぎゅうぎゅう詰めだ。
でも、やっぱり私はここでパーティをして良かったと思える。その方が楽しいもんね。
「「お姉ちゃん（さとり様）、メリークリスマス!!」」
私とお燐とお空とでプレゼントを片手にお姉ちゃんに抱きついた。当の本人は困惑気味に、けれど嬉しそうに抱きとめてくれる。けれど少し怪訝な顔になって、
「……『地獄で会おうぜ』?」
お姉ちゃんも知らなかったみたい。

3歩歩いて2歩逸れる

年末は地霊殿とて忙しい。これほど大きな屋敷なのだから当然大掃除も他の家とは比べ物にならないほど時間がかかるし、それぞれ役割を与えられた施設もしっかり手入れしないといけない。もちろんさとり様が細かく指示を出してくれるのだが、私達はそうもいかない。ペットの中でもかなり高い地位（？）にいるお燐と私はそれぞれ特別な役割を与えられていて、その管理も当然私たちがやらないと。私は灼熱地獄なんて、常識的には危険極まりないものの手入れをね。

「んで、アンタは何をサボってんだい」

あ、お燐だ。お燐はどっちかって言うとペット達のリーダー的存在だから、まあ怨霊の様子よりもペット管理の方が年末は大変だよね。

「ここがどこだかわかるかい？」

「地霊殿の屋上だね」

「正解だ。じゃあここで何してんだ？」

「うーん…考え事？」

「なんで疑問形なんだよ！3歩歩いて灼熱地獄の管理の仕方も忘れちゃった？」

「失礼な！今日の分は終わりですー」

「じゃあこっちの手伝いをしておくれよ。終わったら手伝ってって朝言って…ああ、忘れてたのね」

「んー？」

はぁ、とため息をついて顔を覆うお燐。あー、そう言えばそんなことを言われた覚えがなくもない。でもきっと、今思ったみたいに朝も私は『お燐がまた教えてくれる』と思ったから忘れたんだ。そしてこのままいるとまた忘れる。

「まぁ、いつもの事だからいいけどさ。そんなんじゃいつまで経ってもさとり様に仕事を任せてもらえないよ？」

「それは沢山休めるということ？」

「信頼されないってこと！」
「それは嫌かなぁ」
　さとり様はあまり私にお使いを頼まない。私が忘れると知ってるからだろう。適材適所、って言ってた。いや私は馬鹿だけど、別に頭が悪いって訳じゃないから言葉の意味はわかる。きっと悪気はないけど、それに私が悪いんだけど、なんだかなぁと思った記憶がある。思っただけだけど。
「じゃあ手伝っておくれよ。ほら行くよ、アンタまた忘れるでしょうが」
「うん。いつもありがとうね、お燐」
「いいってことよ」
　私は馬鹿だから、頭の要領が少ないくせにいつも考え事ばっかりしてる。お仕事をしてる時だけは忘れられるけど、何も無い時間は常にそんなどうでもいいことばっかり考えちゃう。さとり様は長所だって言ってくれたけど、結局みんなに迷惑かけちゃうなら短所だと思うけどなぁ。
「んで、そんな大事なことを忘れて何を考え事してたんだい？」
「え？えーっと…あれ、なんだっけ」
「ンなことだろうと思ったけどね、やれやれ」
　お燐はなんだかんだ私が何も考えてないのだと思ってる。私もそう思う。だって覚えてないなら何も考えてないのと変わらないじゃないか。
「あ、そうだ！この前来た人間の子！」
「…が、どうしたのさ」
「あの子、ふわふわしてて不思議だったなぁ」
「なんでも夢を見てる間に幻想郷に来る外の世界の子なんだとか」
「へー。じゃあいつ寝てるんだろうね」
「はぁ？そりゃあんたこっちに来てる間に体は寝て…」
「頭は起きてるの？」
「むぅ…」
　変だなーとか、不思議だなーと思うとずぅっとその事ばっかり考え

ちゃう。でもそっか、寝てる間に来てる幽霊さんならあんな感じかも。
「死体ならあたいがコレクションにしたかったのに」
「碌な死後を迎えられないねぇ」
「なんだと」
お燐、妖怪に死後の安寧を預けちゃまともに三途の川は渡れんでしょ。
「っと、着いたよ。ここの掃除手伝ってもらうからね」
「りょうかーい！」
まあでも、今は忘れよっか。

年末は少し料理も豪勢だ。普段無表情なさとり様もこいし様もご飯を食べてる時は笑顔だから、私は料理をするのが好きだった。もちろんメインはお燐で私はお手伝いだけど。
「お空、後で私の部屋にいらっしゃい」
今日はその日だっけ。3日に1回くらい、さとり様に呼ばれる日がある。その日の私の考え事を見るのが楽しいらしい。
「貴女が覚えてなくても、私が思い出せるわ」
ああ、貴女のその瞳が私はたまらなく欲しいのだ。

猫問答

もうどれだけ昔か忘れたけど、あたいはある子供の女に拾われた。そん時はあたいも妖怪となって間もない頃でそりゃもう人間なんかに負ける気なんぞしなかったね。まあ、妖怪を妖怪と見抜く力はまだ備わってなかったけれども。

お前のことを飼ってやるから光栄に思え、みたいな顔であたいを拾おうとするもんだから、もちろん抵抗したさ。人間なんぞに捕まるもんかってね。

結果から言えばそれは人型をとった妖怪で、あたいはその妖怪から逃げられなかった。行く先々で先回りされて、満足した？なんて聞かれるもんだから、あたいも観念して好きにしろってね。

なんのことはない、そいつはペットが欲しかっただけさ。いや、ペットと言うよりは下僕かな？自分に忠実に従う部下が欲しかったんだろうね。だから家に着くなりこう言われたのさ。

『貴女に住処と食事を与えてあげる。だから貴女は私にこの先ずっと従いなさい』

悪魔の契約ってのはこういうもんなのかね。いや、悪魔の方が誘惑してくれる分優しいかもしれない。あたいは敗者として一生従うしかなくなったわけだ。いやなに、自然界ではよくあることさね。目を付けられたが運の尽き、命があるだけありがたいってね。

しかしまあ強い奴に付き従うのも本能ってもんでさ、こうして生きていければそれで構わんと思うわけよ。今思えば随分と良くしてもらったね、敗者の分際で。今でも切り捨てられてないし、なんだかんだあの人は拾った動物を捨てることなんてしないからね。根っからの動物好きさ。

いやでもね、あの頃はあんな豪華な家には住んでなかったね。ほんとほんと、昔はオンボロな小屋を転々として生きてたよ。少なくとも１００年くらいはあたい以外のペットはいなかったし、あたいの餌

だって今ほど豪華じゃなかった。人の肉を食らってた時だってたくさんあったね。その度にあの人はとても申し訳なさそうな顔をする。なるべく猫として扱ってくれようとしてたんだね。

あの人も昔はそんなに強くなかったね。それにこいし様だって昔は・・・っと、今はあたいの話だったね。要はあたいは最古参のペットだったわけさ。一番長くあの人のそばにいるし、一番信頼されてる自信だってある。フフン、当然だね。

次に長いのはお空だね。そして今日に至るまで数多のペットを拾って来て、今じゃ地霊殿は動物園だ。え、嫉妬？んー、ないといえば嘘になるけど・・・あたいは愛玩動物である前に下僕だからねぇ。あたいに必要なのは愛されることよりも仕事を与えられることなのさ。じゃないと存在意義がなくなっちゃうからね。

「おっと、もうこんな時間だ。そろそろあたいは帰ろうかね」
「えー、もう帰っちゃうの？」
「あんたも主人が心配するだろ？それに仮にも八雲の名前を貰った猫ならもう少し威厳のある振る舞いをしないとねぇ」
「いやいや、威厳あるでしょ」
慌てて否定する言葉に燐はクスリと笑った。
「威厳のあるやつは寂しそうな声で『えー』なんて言わないよ」
「むむむ…」
言いくるめられた八雲の猫は大人しく引き下がることにした。
帰り道、彼女はいつものように主のことを考える。きっと帰るなりその瞳は先程の会話を覗き、そしてこう言うのだ。
『あら、楽しそうな話をしてきたのね。私にも聞かせてくれないかしら？』

お地蔵さんのお友達

久々に登場した気がする、こいしです。いやずっと散歩してたけど、なんとなくね。ココ最近ずっと視線を感じてたんだけど、暫くなくなったと思ったらこれだよ。私を見つけるのなんて誰にも出来ないのにねー。

と、私が散歩をしていると生命力溢れるお地蔵さんを発見。おやおや、これはたいへん珍しいのでお参りしなければなりませんな。

可愛くメイクしてあげよっと。

「やめて！」

おお、本当に動いた。狸とか？

「お地蔵さんなんですけど！れっきとした！」

あらら、それはごめんなさい。でもメイク嫌だった？女の子なら可愛くなりたい願望はあると思うんだけどな。

「御手元の油性マジックペンで可愛くなれるとは思えないのだけれど」

そんなことないよ？私のお姉ちゃんは朝起きたらとっても可愛くなってたりするし。

「絶対変な顔になってるじゃない！」

そんなことないと思うけどなぁ。ところで貴女はどうしてこんなところに？瘴気が濃くって嫌にならない？

「うーん、そうは言われてもここに作られた地蔵だものねぇ。慣れよ、慣れ」

そんなもんかなぁ。でも、地底に住んでたら地底に慣れちゃうものね。そんなもんかな。

「住めば都ってね。ところで、今日はわたしのこわ～い友達が遊びに来るから、ここから離れた方がいいわよ？」

怖いお友達？みんなが逃げちゃうほど？

「そうそう！見たらみんな逃げ出しちゃうもの。…あらら、噂をすればってやつね」

「こんにちわ、成美。…それと、珍しいですね。古明地こいし」
　これはこれは閻魔様、姉がいつもお世話になってます。
「あれれ？2人は知り合いだったの？」
「知り合い…というよりは、私は彼女の姉の上司に当たるわね」
「うーん…？ってことはこの子は鬼？」
「どうしてそうなるのよ…。成美、貴女は少し地獄のイメージが雑すぎるわ」
　そうだよ！私があんな四六時中うるさい酒飲みに見えるの!?
「そもそも鬼がどんな生き物なのかわかってない節があるわね」
「えへへー」
　むむ、なんとなくキャラ被りを感じる…。
「何を対抗心を燃やしているんですか」
「ていうか映姫ちゃん、いつもみたいにお説教しないんだね」
　確かに、私説教されたことないかも。
「こら。今の私は閻魔なのだから、映姫様か閻魔様と呼びなさいと言っているでしょう」
「えー、いいじゃん映姫ちゃんで。そっちの方が可愛いよ」
　なんと、この閻魔を相手に舌戦を繰り広げる猛者がかっていただろうか。目には目を、地蔵には地蔵をってことかな。
「こほん。古明地こいし、貴女は…少し自由奔放過ぎる。古明地さとりがよく心配していましたよ？ちゃんと定期的に顔を見せてあげなさい」
　はーい。
「それだけ!?いっつも長々と相手の心が折れるか相手が逃げるまでお説教するのに!?」
「失礼な、私は常に思いやりをもって説教をしているだけです」
　おおー？もしかして私のこと気遣ってくれてたりする？
「…人のため、とはいえあくまで趣味の範囲です。人の深い事情に踏み込んで心をいたずらに荒らしたいわけではありませんから」

「…？」
　思ったより優しいのね。でも大丈夫だよ、私は自分で選んで逃げたんだもの。貴女の言うことが届くかは別として、私は今を悔いているわけじゃないわ。
「そうですか。…私が見るのは過去だけ、未来は誰にもわかりません。貴女が幸せになれることを私は願ってますよ」
　ん、ありがと。
「え、なに？実は闇が深かったり？」
「こら成美、言葉が過ぎますよ」
　いいのいいの。ね、それより普段２人はどんなこと話してるの？私も混ぜてよ。
「いいよー。私よく映姫ちゃんから相談されるんだ。この間なんか…」
「わあああ!!貴女は少しどころか口が軽すぎる!!」
「もー照れ屋さんなんだから」
　お、なになに？閻魔様の恥ずかしい話？聞きたいなぁ私。
「ダメです！黒！黒ですよ！」
「別に恥ずかしい話じゃないよ？みんなと仲良くしたいけど立場上難しいなぁって相談」
「成美いいいい!!!」
「何言ってんの映姫ちゃん、今そのチャンスがまさに転がってるのに見過ごすつもり？」
　なーんだ、そんなことかぁ。
「そ、そんなことって！私はかなり真剣に悩んでるんですよ！」
　別に悩まなくっても。じゃあ閻魔様は今日から私と友達ね？
「え、いやしかし私は立場的に・・・」
　いーじゃん、閻魔様が友達作っちゃダメなんて誰が決めたの？誰も責めやしないよ。仮になんか言われても黒！って言っちゃえばいいじゃん。
「ね、こいしちゃん？もこう言ってるんだし。それに映姫ちゃんと私も友達でしょ？だからいいじゃない、閻魔は閻魔、映姫ちゃんは映姫

ちゃんで。公私混同しないでしょ？映姫ちゃんならさ」
「成美…はあ、なんだか大変気を遣わせてしまったみたいですね。ごめんなさい」
いーのいーの、お互い様でしょ？しかし、お姉ちゃんが閻魔様を気に入ってる理由がようやくわかったよ。
「古明地さとりが？」
うん。貴女のこと、『あれで結構可愛い人よ』って言ってたの、やっと理解出来た。
「なっ…！ば、馬鹿な！心は読まれないようにしてたはず！」
いやいや、能力に頼り切って相手を見てるわけじゃないよお姉ちゃんは。仕草とか癖とか、そういう細かいところまで全部見て一人一人判断してるんだもの。きっと貴女の可愛い悩みもお見通しね。
「～～～っ！あ、あんな性悪とはお友達になりたくありません！」
おお、それは最高の褒め言葉だろうね。

私をCBに連れていって

「やっぱり地底の妖怪って人気ないのかな？」
「開幕でメンヘラ拗らせられてもね」
　紅魔館程じゃないにせよまあまあの本の量がある我が家の図書館。お姉ちゃんの趣味で集まった本ばかりだけど、案外古今東西色々なところから仕入れた本がある。人里の本屋だけでなく、それこそ幻想郷に来る前から集めていた沢山のもの。
　そんな一室で私は本に夢中なお姉ちゃんに語りかける。
「双六したくない？」
「したくない」
　即答だった。うーん双六というよりはどちらかというと・・・。
「じゃあマリ○パーティ？」
「怒られるわよ」
　危ない危ない。下手に名前を出すのは良くないね。謎の力でメタ的な発言をさせられ謎の力で規制される私は誰に振り回されてこの生を過ごしていくというのでしょう。
「それが二次創作ってものよ」
　うわーお。これ以上は世界観が壊れるからやめてね。それすらも私たちには止められないんだけどね。

「しかし暑い季節ももう終わりだねぇ。地底の夏は暑いったらありゃしない」
「冬はあったかくて良いじゃない」
「空調設備の整った部屋に引きこもってる人が言っていいことじゃないね」
　お姉ちゃんは肩をすくめると再び読書に戻る。昔はこんなに大きな屋敷もなかったものだから、そこら辺の一軒家とか捨てられた小屋なんかに私物を置いて狭苦しく暮らしたものだ。うんうん、感慨深い

ね。
「何読んでるの？」
「推理小説」
　短い返答。推理小説なんてなんじゃそりゃって手法で人殺しが行われて妙にもやもやが取れないものばかりじゃない。
「そんなことないわよ？この意味不明さはどんな考えから来たのか考えることで知見が広がるってわけ」
「それ書いた人をバカにしてない？」
　再び肩をすくめ読書に戻る天上天下唯我独尊お姉ちゃん。そもそもお姉ちゃんが人妖全て含め自分より上だと心から敬った相手などいない気がする。
「人のイメージを勝手に決めつけることは愚かだと思わないかしら」
「でも人のこと見下してるでしょ？」
「いい？こいし。人を見た目や第一印象だけで判断するのは自分の損害に直結するわ。常に自分の見ている相手はどんな面を持ってるのか、そしてどのように変化するかを観察することが大切よ」
「でもお姉ちゃんは他人のこと全員バカだと思ってるでしょ？」
「大事なのは常に価値観を変動させること。一定の価値観や自我は自信になるけど、同時に自分の成長を殺す毒にもなる」
「でもお姉ちゃんは自分が絶対的に正しいと思ってるよね」
　ふぅ、と息をついて本へと目を戻すお姉ちゃん。妖怪は精神攻撃に弱いとか誰か言ってた気がするけど、あれは嘘だったのかなぁ。
「こいし、今日はあんたの好きなものを作ってあげるわ。晩御飯何がいい？」
　こうやって今日も私はお姉ちゃんに勝てずに一日を終えるのだった。

後悔先に立たず、後から全速力で追いかけてくる者

甘いものを食べすぎると塩味が欲しくなるように、日常にもまた非日常となるスパイスが求められるってわけ。つまり平穏だけじゃみんな飽きちゃうんだよね。

「・・・？そうね」

うん、私もなんでこんなこと言ってるかわからないけど、そういうことだよ。

ところでお姉ちゃんはあの時ああしてればみたいな後悔ってないの？

「そりゃあるわよ。でももう遅いじゃない」

いやそうなんだけどね。こう、『そうじゃなかった自分』みたいなのを妄想するときってたまにない？理想の自分みたいなのに近いと思うんだけど。

「あったかしらねぇ・・・今が理想に近いから何とも」

ああそうですか。そうですよねお姉ちゃんに聞いた私が悪かったねごめんね。

「そんなに失礼な返事をされるようなことを言ったかしらね」

いやいや、いつも通り私の大好きなお姉ちゃんで安心したよ。

次はお燐に聞いてみることにしよう。あの子はこの地霊殿で一番まともといっても過言じゃないし、きっと私の期待するような答えが待ってるはず。

「あ、こいし様。めずらしいですね、私に何か？」

「うん。お燐はここ最近でなんか後悔したこととかある？」

「微妙に嫌な質問ですね・・・」

それもそうか。まあほら、懺悔するつもりで私に話してみなよ。

「ええー・・・？最近はあまりないですけど、人と話してるとそのあと

くらいにもっとうまい返し方があったなぁとか思ったりしますね」
あーそれそれそういうの。やっぱりそんなときってもっとうまくできたら違ったかならみたいな妄想したりする？
「妄想・・・うーん、失敗したなぁって思ったりするとたまにありますね」
だよねだよね！いやーお燐に聞いて正解だったよ。今度ご飯を御馳走してあげようね。
「ほんとですか!?」
ほんとほんと、あとでね。

「で、あんたは何しに来たのよ？」
「神社の掃除の手伝い？」
「本当にそうなら助かるんだけどね」
「まあまあ、一回休憩してもいいと思うよ」
私がぺしぺしと隣の床を叩くと霊夢は手に持った竹ぼうきを立てかけて隣に座った。
「最近は余計な客も少なかったのに」
「余計じゃない客ならいいでしょ？」
「余計な客なのよ私からしたら」
冷たいなぁと思いつつ本題に入る。なにせ私たち妖怪は長生きだ。そんな妖怪に後悔の念を問うたところで仕方ないなんて返答が関の山。なら人間に聞くのが一番いいと私は考えたのだ。我ながら冴えてるね。
「霊夢は最近後悔したことってある？」
「何よ急に。・・・ないけど」
「はぁ～～～～・・・・・・・」

終了。なんでよ、一つくらいあってもよくない？なんていうか、こう、ねぇ？
「別になくてもいいでしょ。むしろいいことじゃない」
「そうなんだけど！そうなんだけどさ～～～～」
「大体後悔した時にはもう遅いんだから、仕方ないでしょ」
「・・・うわぁ」
本当に人間かと疑いたくなる。お姉ちゃんの影がちらついてちょっと引いてしまった。いやでも霊夢はこういう達観したところあるし、聞く相手を間違えたというかそもそもこの幻想郷にまともな人間がいないというか。
「そんな過去に追われてばかりじゃおちおち掃除も出来やしないわよ。今できること以外に何ができるっていうの？」
そうだね。もうほんとにもう、おばあちゃんだよ霊夢は。
「命がいらないのね？」
ん、これは後悔。そう感じる頃には私の体は地面を蹴って神社から脱兎のごとく逃げだしていたのだった。
「今死んじゃったらお燐との約束がなくなっちゃうからね」
がま口が軽いことに気づいた私はまたしても後悔することになるのだが、それはもう少し後のことだ。

出番が欲しいこいしちゃん

ここ数回くらいの話、闇深い私ばっかりで印象操作的なものを感じるんですけど。私全然そんなことないんですけど。ねえお姉ちゃん？

「いや、知らないわよ・・・。ていうか話って何？貴女は何の話をしてるのかしら？」

いやもうほんとに全然いい子なんですけど私。つまりそろそろ出してくれてもいいよねってことだよ。

「ええ・・・どこに？」

決まってるでしょ！ロストワー

長い夢を見ていた気がする。なんかこう、ちょっとよくわからない夢を。

「目が覚めたかしら？」

お姉ちゃんだ。私、変な夢を見てた気がする。

「それは大変だったわね」

うん、それでね、なかなか私の出番がないっていう悲しい夢だったんだよ。

「それはもちろん貴方の能力のせいでしょうに」

え、でもお姉ちゃんも出番なかっ

「いい？何も目立つことが正義とは限らないわ。重要なのは自分の在り方を見失わないこと。それだけが私達妖怪の唯一の生きていく術なのだからね」

なんか深いこと言って誤魔化そうとしてない？私はメインのお話

もってるし大丈夫とか思ってる？ねぇ探偵楽しい？
「い、いやそういうわけじゃ・・・」
目が泳いでるねぇ!?な～～～～にが反則探偵よ美化されすぎでしょこんな産業廃棄物を泥水で煮詰めたような性格してる女がクールぶっちゃってさぁ！お姉ちゃんならお燐におつかいなんて行かせずに自分から見に行って犯人を問い詰めながら言い訳とアリバイを楽しむでしょ？そして相手が自ら墓穴を掘るまで質問攻めして、矛盾が生じた瞬間にこういうの、『あれ？おかしいですねぇ』って満面の笑みでね。推理のプロセスにはなんにも興味がなくて犯人が踊り続ける様を見続けたいっていう、そういう女なんだから！
「・・・」
・・・うん、いや、その、嫉妬でね？やっぱり完璧な姉を持つと妹の私としても劣等感がすごいというか。いやほんとに、あまりにもそういう・・・羨望？うん、そういう感じで。言いすぎちゃったごめんね。私だって本心でこんなこと言ってるわけじゃ・・・あ、そうだ！友達との約束思い出したから行ってくるね！
「座りなさい、こいし」
あ、あはは・・・目が笑ってないよお姉ちゃん。口だけ笑ってると人って怖いんだよね、いやもちろん妖怪もね。だからその絶対零度の視線はちょっと私には聞きすぎるかなぁって。
「お話しましょう？一度私のことどう思ってるのか、私も聞きたかったの。知ってるわよ？あちこちで私のこと溝川を煮詰めたとか最低のクズとか、散々言ってくれてるみたいじゃない？山の神様がこの間お前の妹がすごい色々言ってたぞって教えてくれたの、心の中でね」
あー・・・。ちなみに今日って晩御飯食べれる？
「お昼ご飯なら食べられるかもしれないわね？」
マジかぁ・・・。
教訓：親しき中にも礼儀あり。あと調子に乗っちゃダメ。

やりすぎ幻想郷

最近浮気気味というか、こっちの方もちゃんと見てほしいよね。全然終わってないし。

「最近のこの前半のメタコーナーみたいなの、なんなのかしらね」

書いてて恥ずかしくならないのかしら、とお姉ちゃんはため息をつく。そんなもの、読者に読んでもらうために書いてるんだから俯瞰視点で書くわけないでしょ。

「それもそうか」

せっかくだし私もなんかオリジナルキャラクター作っちゃおうかな、古明地こいしの妹とか。名前は何にしよう、さとり、こいし、と来たら次は・・・いや思いつかない。

「悲しくなるだけよ、イマジナリーフレンドって」

それもそうか。

ついぞ煙草を吸おうとも全く第三の目が開かなくなってきたこの頃。そういやそれがきっかけだったなって忘れてる人も多いんじゃないでしょうか。慣れって怖いね。

話は変わって、私は結構色んなものの影響を受けやすい、って自覚がある。推理小説を読むと探偵の真似事がしたくなり、勧善懲悪の物語を読むと正義のヒーローに憧れたりする。正義って何？って聞かれたらまあ答えられないけどね。お前が信じるお前を信じろ。

で、私が今何にはまっているかというと。

「お姉ちゃん、まだ気づいてないの？この幻想郷で起こっていることは全て秘密結社フリーメイシンが裏で操ってるんだよね」

「・・・頭痛が痛いわね」

そう、突如として人里で流行りだした陰謀論だ。これが中々に説得力がある、というか色んな謎の共通点を暴き出し、そこから秘密結社がありその正体を突き止めようというものである。

「で、我が聡明なる妹君におかれましてはどうしてそのようなクソく

だらない陰謀論を嬉々として私に語ってくるのかしら」
「こうしちゃいられない、早くみんなにも伝えないと！」
「待ちなさい」
　地霊殿を抜け出すが早いかと思いきや私の肩を掴んで離さないのはお姉ちゃん。随分と情熱的だけど今はそれどころじゃないんだから。
「人里に隠された3つの『6』。これが意味するところは、お姉ちゃんならもうわかるよね？そう、もう始まってるってことなんだよね」
「何も始まってないわよ」
　驚いた、まさかここまでお姉ちゃんが鈍いとは。いや、まさかわざと、いやいやもしかして私を止めようとしているのではないだろうか。唯一この世界の秘密に気づいてしまった私を、組織から狙わせないためにここで引き止めようとしているんだね。そうに違いない。
「まさかお姉ちゃんがフリーメイシンの一員だったなんてね・・・。でも、大丈夫！私はお姉ちゃんの味方に決まってるじゃん！だから手を貸すよ、どんな悪事だったとしても！」
「盛大な勘違いをしているところ悪いけどね」
　私とは対照的に冷ややかな視線が冷蔵庫、冷凍庫くらいの温度になりついには絶対零度の視線へと最終進化。
「私は秘密結社とやらの一員でもなければフリーメイシンなんてものはそもそも存在しない」
「隠さなくていいんだよ。私がそんなことでお姉ちゃんから離れると思ったの？もっと妹を信じてよ！」
「話を聞けよ頼むから」
　興奮冷めやらぬ私はお姉ちゃんを説得しようと試みたが失敗に終わってしまった。しかし秘密結社が一体何をしているところなのかは気になるところ。
「大体、あんたなんでそんなに裏に人を潜ませたがるのよ」
「だってこんなに色んなことが重なって、偶然なわけないじゃん」
「あのねぇ、その繋がってないことをあたかも繋がってるように見せてるのが商法ってことよ」

「くっ、意地でも認めないつもりね・・・」
「だからそんなもんないんだって」
もしやお姉ちゃんは脅されてるのではないだろうか。いやそんなわけないか、お姉ちゃんに限って人に屈することはない気がする。
と、考え込んでいるとずいとお姉ちゃんが私の顔に思いきり顔を近づけてきた。不意打ちで好きな人の顔が目の前に現れたらもう私の顔は真っ赤っかになってしまい意識が遠のいてああこれが宇宙の真理だったのね・・・。

全く自分の妹ながらこの影響の受けやすさはいかがなものかと思う。この頭の中と心の中は一体どうなってるのやら。
「変な気を起こさないといいのだけれど」
一応この辺りは信頼している。まあ異変に首を突っ込んだりと最近その心配も現実味を帯びてくるというものだが。いっそ人里でその陰謀論とやらを語っている人間を特定して始末してやろうかと思ったが、これも却下した。どうせもういろんな人間に広まっているのだろう。だとしたら里のいくつかを灰にするくらいやらないと意味がない。そんなことをしたら私の立場と言えど八雲紫が黙っていないだろう。ふうと息をつく。
見下ろすと気を失って(?)すやすやと寝息を立てる妹の顔がある。秘密結社ねぇ、と小さく呟くも私のもとにすら全く入ってこない情報なのだから存在するわけがない。第一そんな危険なものが存在するとしたら私が真っ先に抑えているはずだ。
「・・・私まで何影響されてるんだか」
首を横に振りくだらない妄想を消し去り、こいしをベッドに寝かせるために立ち上がった。そろそろ幻想郷の会議の時間だし、お燐にいつまでもお使いさせっぱなしというわけにもいかないだろう。・・・今日私が出るのは決してその陰謀論とやらの話題が出ることを期待してというわけではない、いやほんとに。

山の神やら妖怪の賢者やら吸血鬼の当主やらと錚々たるメンツが話し合いをする中、私はふと考えた。裏から幻想郷を支配する組織、人里と妖怪たちをコントロールする創造主、それぞれの息がかかった人里の有力者たち。

「さとり、珍しく貴女自ら出向いたと思ったら上の空？流石に傲慢すぎるのではないかしらね」

八雲紫がジト目で睨んでくる。

「ああ、いえ・・・。すいません」

すると目を丸くし、扇子で口元を隠した。私が謝るのがそんなに珍しいですか、そうですか。

「貴女達の話はちゃんと聞いてますよ。続けてください、幻想郷を裏から操る秘密結社の会議をね」

くすくすと笑いながら突拍子もないことを言う私を、八雲紫はまるで毛虫でも見るようなしかめつらで眺めていた。

線対称ガール

人からの目など、私には無縁なものだと思っていた。否、無縁なものにしたかったのだ。他者からの嫌悪が、憎悪が、あらゆる黒い感情が私に向けられているような気がして私は瞳を閉じた。しかしそんな私にもとある理由で人の目が集まった時があった。その時の高揚感は未だに忘れられない。宗教戦争だなんだと言っていたが私にはそんなことどうでもよかった。ただ人に応援されるということがこんなにも嬉しいことかと心動いたんだ。とどのつまり何が言いたいかというと。

「いや～～～～私の方が先に出ちゃってごめんねお姉ちゃん!!!!!」

「・・・何の話かわからないのだけど」

いやいや、いやいやいや。とぼけても無駄ですよ奥さん。ついに私も出演となりましたじゃないですか。

「・・・なんのことかしら」

いや～～～～もう姉妹一緒に出られたのもよかったけどプレイアブルキャラクターとしては私が一足先だったようでね。ええ、それはもうほんとに残念というかぜひとも姉妹一緒に実装してほしかったというか先に実装された優越感というか。

「人気投票も私の方がいつも上だもんね」

「口を慎め・・・」

おっと逆鱗に触れたみたい。まあまあ落ち着いてよ、ゆーて一桁でしょ？7位？8位？まあ下なんて見てないから刹那で忘れちゃった。

さて万年8位のお姉ちゃんのサードアイがエンペラーアイに変わる前に機嫌を直さないと。

「お姉ちゃんがゲームのキャラになったらどんなタイプかな？やっぱり妨害系？」

「やっぱりって何よ。まあ力で押すよりも策で圧倒する頭脳タイプでしょうね」

「自己顕示欲が強すぎるあまり言葉から溢れてきてるよ」
　圧倒するて。まあ非力といえば非力ではあるけども、こう、なんだろうね。面の皮が厚いというか図太いというか物怖じしないというか。
「ブチギレてる勇義の前に平然と立ってるんだもんね」
「暴れられたら堪ったもんじゃないでしょうに。地底のリーダーとして止めに入るのは当然よ」
「それでも本気の鬼の四天王の前に涼しい顔で立ってるの見たら失神するよ」
　ちなみに私はお姉ちゃんが死んだと思って本当に失神した。ショックで1週間寝込んでたらしい。
「起きるなり大泣きするわ抱き着いて離れないわであの時はすごかったわねぇ」
「心配するこっちの身にもなってよね」
「あんたが言うか」
　心配の種類が違うじゃん。目の前で肉親が、しかも大好きなお姉ちゃんが殺されるかもしれないっていうのに。
「私は目の届かないところで死んでるんじゃないかって毎日気が気じゃないのよ」
　むむむ、じゃあおあいこで。
「おあいこじゃなくてこまめに連絡を寄こしてほしいのだけれどね」
　忘れちゃうんだよね～。ていうかどうやって連絡するのさ。スキマのおばさんにでも頼む？
「なんのためにペットを与えるんだと思って。って置いてけぼりにしたんだっけあんた」
「そうかも」
「泣いてたわよあの子たち。帰ってる時くらい接してあげなさいね」
「はーい」

「ってことがあったんだよ」

「お前は私に何を伝えたかったんだ？姉と仲がいいことなら知ってるし、もし仮に出演したことか人気投票のことを自慢しているようなら今すぐ弾幕勝負だ」
「うーん今すぐ弾幕勝負だね」
「よしよし今日こそボコボコにしてやるから覚悟しろ」
　終始無表情で私の話を聞いて無表情で喧嘩を吹っかけてきたこの子はこころちゃん。私の友達でお面の妖怪だ、多分。無感情で表情豊かな私と真逆で感情豊かなポーカーフェイスなのがこころちゃん。面白いね。
「あ、弾幕勝負の前にさ」
「なんだ？」
「もし自分を心配してくれてる人がいて、でもその人に迷惑をかけてばっかりの時ってどうすればいいかな？」
「そんなの今すぐやめろとしか言えんだろ」
「やめれない時は？」
「なんだそりゃ。そしたらもうごめんなさいしかないな」
「ごめんなさい、か。確かにね」
「なんだなんだ変なやつだな」
「え～貴女にだけは言われたくないなぁ」
「なんだと！」
　ごめんなさいお姉ちゃん。私はお姉ちゃんに心配させてばっかりで迷惑かけてばっかりだけど、そのおかげでこんなに友達いっぱいできたよ。次帰った時はこう言おう、覚えてたらだけど。

宇佐美■子の独白

私が高校の頃の友達が・・・友達というほど親しくない程度のクラスメイトが、いつの日か私に言ったことがあった。

「自販機の天然水がさ、１１０円だとなんかちょっと損した気分になって１００円ぴったりだとすごい得した気になるよね」

貴女もそう思うでしょ?とでも言いたげな目でこちらを見ながらそう言うので、私はそのとき曖昧に笑って誤魔化した。

たかが１０円で人の気持ちが変わるものか、とその頃の私は思ったのだ。別にお金に困るような家庭にいたわけでもなく、高校生ながらのお小遣いとしてはなかなかの額も貰っていたと思う。いや当時でもやっぱり他との違いはよく感じていた。

つまるところ、私のこの頃の高慢さ加減と言ったらもうこの手記に残したくないくらいだったということだ。超能力が使えて、不思議な世界に出入りできて、成績も常にトップで。きっと私は選ばれた人間なんだという無意識の自覚が頭にこびりついていた。だからそんな矮小な違いなんぞ私にすればとるに足らない、くだらないものだと思った。彼女からすれば、私に議論させる気もなければといったところだろう。頭の中でこんなしょうもないマウントを取っているとも思うまい。

そんな私の肥大化した自意識とも呼べるものを打ち払ってくれるのが幻想の世界だった。無意識に他人を見下している自分と、幻想の中にいる自分、果たしてどちらが本当の自分なのか。それともどちらも本当の自分なのか。あれから１０年経った今でもたまにそんなことを思う。私の幻想の世界は消えてしまったのか、それとも本当にあった幻想の世界が消えてしまったのか。

「どう?これ」
「どう?って言われても」
　ある大学のカフェでの会話。二人の少女は丸いテーブルを挟んで向かい合っていた。二人の視線の先にはテーブルの上に置かれたタブレット端末・・・ではなく、かなり年月が過ぎたと見える、紙媒体の日記帳だった。今どき紙に文字を記す人なんていないのだから、当然昔のものということになる。
「ご先祖様の手記でしょう?」
「そうなんだけどさ」
「貴女のご先祖様って超能力使えたのね」
「驚かないんだ?メリーが境界見える異能持ちだからかな」
　メリーと呼ばれた金髪の少女はため息混じりに対面する黒髪少女を指さした。
「異能持ちの貴女が子孫だからよ、蓮子」
「それもそうか。じゃあメリーのご先祖様もなんかあるのかな」
「さあ?」
　蓮子と呼ばれた少女は特に気にした様子もなくカラカラと笑った。
「誰の手記かはわからない、と」
「そうなんだよねぇ。でも問題はそこじゃなくてここ」
　蓮子は文章の中の1か所を指差した。
「幻想の世界ってあるでしょ?これ、なんか思い当たらない?」
「境界の中の世界・・・」
「そう!」
　メリーの答えに蓮子は目を見開いて身を乗り出した。
「私のご先祖様はきっと境界の中の世界に行けたんだ!そしてそれを楽しそうに記してある・・・」
「境界の中は危険なはずなんだけどね。超能力が使えたから平気だったとか?」
「それがこの『幻想の世界』について書かれたものはまだ見つかってないんだよねぇ」
「ふむ。この人は自分の妄想だったんじゃないかって疑ってるみたい

だけど・・・」
　じっくりと手記を読み返しながらメリーは呟いた。
「メリーはどう思う？妄想だったと思う？」
「そうかもしれないしそうじゃないかもしれない。確かめる術はないからね。でも・・・」
「でも？」
「あったほうが、楽しいじゃない？」
　そう言ったメリーの言葉に笑顔で応えるのは他でもない蓮子だった。
「それでこそ、秘封倶楽部の一員！」
　彼女たちの目は今日も未知への興味で満ちている。

　地底に、いや、地霊殿にいると考え事が増える気がする。自分の家が一番落ち着くから、といえばその通りなのだけれど。自分の部屋に帰ると前に董子が地底に来た時のことを思い出す。
「董子、元気かなぁ」
　きっと元気だろう。死んだらこっちに来るのかな、それとも閻魔様のもとに行くのかな。また会いたいな。
「人間かぁ」
　人間は好きじゃない。かといって嫌いでもない。興味はあるけど関わりたいかはまた別。でも董子は好き。
「部屋、どうしよっかなぁ」
　董子に人が住んでる部屋だと思わなかったなんて言われちゃった。無機質すぎるなんて言われたけど、たまにしか帰らないんだから特に何も置く必要ないじゃんって思っちゃう。
「フランの部屋はぬいぐるみとか色々あったなぁ」
　あと血とか。

「ま、いっか」
そのうちなんとかしよう。

ギャン泣く子も黙る鬼の大将

「今日は何の日？」
「え、今日なんかあったかい？」
「ううん、なんも無いよ」
　地底の旧都と呼ばれる街。色んな妖怪が行き交い賭博やら酒やらとロサンゼルスもビックリなこの街にある一件の飲み屋で、私と大柄な女性が喋っていた。
「最近もう、捨てられたんじゃないかって思ってたんだよね」
「…もしかして、さとりの奴に？」
「まさか、お姉ちゃんは一生私の味方だよ」
「だよなぁ。じゃあ誰に？」
「うーん、神に見放された？」
「なんで疑問形なんだい」
　うまく説明出来ないけど、こう、失踪したというかネタが切れてるというかモチベーションが微妙そうというか。とにかくそんなくだらない理由で私は見捨てられそうになってた気がする。こんなに可愛い子を放っておくなんてどうかしてる。頭おかしいよほんとに。
「しかしこいしちゃんから飲みに誘うなんて、こんな事があるとは思わなかったよ」
「嫌だった？」
「それこそまさか。誘われて断る鬼なんていないさ」
「確かに、売られた喧嘩も誘われた飲み会も全部行くよね」
「そうそう。ましてやこんな可愛い子からのお誘いなんて断るわけがない」
「もしかして口説いてる？」
「おうよ。……いや、なんか今冷たい視線を２つほど感じたからやめておこうかな…」
「珍しい、勇儀が怖いものなんてあるの？」
「ないと言いたいところだがあるんだなこれが。主に力で解決できな

いことは怖い……というより面倒だ」
　鬼らしい。しかし鬼の四天王だの大将だのと言われる彼女がそこらへんの阿呆と同じ頭をしてるわけもなく、聡明であることは間違いない。性には合わないだろうけど。
「全部力で解決しちゃえばいいのに」
「それが出来たら苦労しないよ」
「苦労してるの？」
「たまにね」
　その立場上疲れることもあるだろう。お姉ちゃんがあれだけ死んだ目で地底の管理をしているのだから、そこまでじゃないと言えど上に立つ者の苦労というのは少なからずあるに違いない。よかった、私はそんな面倒なことしなくていいし。
「愚痴っちゃう？」
「いいや、酒は楽しく呑みたいもんでね」
「さいで」
「それに愚痴るほどのこともないよ。大抵の事は時間が経てばどうにかなってるからねぇ」
「おお、時間が解決するってやつだね」
「そう。時間は残酷だが、時にその残酷さに助けられたりもするもんだ」
「私の悩みも時間が解決すればいいのにー」
「いつかは解決するんじゃないか？死ぬまで解決しない時もあるだろうけど、１０００年もすればどうにかなってる事の方が多いさ」
「１０００年かぁ。長いようで短いようで長いね」
「１０００年後にはあっという間だったって言ってるだろうよ」
　確かに。私は今何歳だったかな。もしかしたら１０００歳だったかもしれない。あんまり興味もないし、１０００年前のことも覚えてないし、…ああ、これが時間が解決するってことなんだろうな。
「勇儀は１０００年前どんな鬼だった？」
「え、うーん…覚えてないなぁ」
「流石に？」

「でもまあ、今よりやんちゃだったんじゃないか？ただの鬼の1匹だったかもしれないし…今も大して変わらないんだけどねぇ」
「大将なのに？」
「勝手に周りがそうしてるだけさ。ほかのやつより強いだけだ」
「それは…一理あるか。でも誰かが群れの長にならないといけないからね。槍玉に挙げられるのも致し方ないことだってある」
「だな。あたしに出来ることならやってやるさ」
「器のデカさは間違いなく大将だね」
「はは、ありがたく受け取っておくよ」
　実際に彼女が頑張っているおかげでお姉ちゃんの負担が減っている部分もあるのだろう。そう考えると感謝の念も自然と湧いてこようというものだ。
「ささ、おつぎいたしやす」
「なんだいその口調」
　私がお酒をつぐと勇儀はそれをグイッと飲み干した。これが面白くてどんどんとついでいく。それを勇儀はまた飲み干す。さすがは鬼の頭領、まだまだ飲めるみたいだ。そうして陽の当たらない地底で夜が明けていくのだった。

「う、ううん…」
　いつの間にか寝てしまっていたらしい。目を覚ますと見知らぬ天井が視界に入る。辺りを見回すとどうやら宿屋の一室のようだが、昨日は確か…。
「あ、おはよう」
　隣から声をかけられる。声の主は古明地さとりの妹、古明地こいしだ。ああそうだ、たしか昨日は彼女とふたりで酒を飲んで…私が潰れるまで？この私が？
　そうだ、彼女が何故か次々と酒をついでくるものだからつがれる度に飲み干していたのだ。しかし潰れるまで飲んだことなんてほとんどない…はずだ。

「どうしたの？」
「ああいや、なんでもな…」
　そうして彼女の方に向き直った時異変に気づく。寝床がひとつしかないのだ。布団もひとつしかないため、当然彼女と私は同じ布団に入っていたことになる。そこまではいいのだが、私の目に映るこいしの姿はいつもの派手は服ではなく、布団からはみ出た肩は肌色を顕にしていた。
「えっーとぉ…」
「顔色悪いよ？大丈夫？」
　頬を一筋の汗が伝う。こころなしかこいしの声がとても優しく聞こえる。いやいや、まだそうと決まったわけじゃない。状況証拠だけで判断するのは愚かだ。
「そんなに見つめられると恥ずかしいよ…」
　考え込んでいたせいか、無意識にこいしを凝視していたようだ。顔を赤らめて目を逸らす仕草にとても色気を感じる。
「……ツスゥーーーー」
　冷や汗が止まらない。もしかして„„„„やった„„„„か？潰れるほど飲んだ経験も殆どないから今どうなってるのかさっぱりなんだが、やらかしたか？
「あ、あの！昨晩は…その…」
　やべえ。やべえやべえやべえやばいやばいやばい。いくらなんでも地霊殿の主の妹に手を出したとあれば流石の私もまずい。寄ってきた女の相手くらいはした事あるし、別にそこまで抵抗もない。だが相手が悪い。もしかして酔いのあまり容姿の良さに惹かれて手を出したか？…ダメだ、考えても分からない。
「あー、その、なんだ。恥ずかしいことに酔いが周り過ぎてたのか、昨日のことをあんまり覚えてないんだ…主に夜のことを」
「あ…そ、そうだよね！急に倒し…倒れちゃったし！」
「そうなんだよ。だから何があったかいまいち覚えてなくて申し訳ないんだが…」
「ううん、大丈夫！でも、私嬉しかったよ。勇儀があんなに…してくれ

て」
うーん、アウト。完全にアウトっぽい。どうする？さとりに知られたらとんでもない事になる。どうにかして隠蔽したいが嘘をつくのは鬼として許せない。いやそもそもあの古明地さとりに嘘は通用しない。ならば…。
「そ、それでなんだけど。一応ね？覚えてないならいいんだけど一応、昨晩のことはお姉ちゃんに内緒にしてくれる？」
「!!ああ、もちろん！もちろんだとも！」
渡りに船とはこのこと。まさか相手から望んでくれるとは思わなかった。正直このことを盾に迫られたらいよいよ終わりかと思ったが、どうやらこいしの方もこの関係を秘密にしたいらしい。あとは風化するのを待つだけだ。
「…内緒ね、えへへ」
恥ずかしそうに笑うこいしを見て、改めて私はとんでもないことをしたのだと認識し直すのだった。

「はい、お気をつけて～」
「昨日はごめんね、部屋汚しちゃって」
「大丈夫ですよ。しかし気をつけてくださいよ、地霊殿に住まうお方がこんなところで粗相してたら何を言われるかわかったもんじゃありませんから」
「えへへ…」
「吐くまで飲むなんて、童じゃあるまいし」
「はぁい…」

1013

恐ろしく長い冬眠から覚めたような感覚。どうやら私は冬どころか春夏まで通り越して秋に目を覚ましたらしい。去年のはずのハロウィンの思い出が昨日のことのように思い出せる。妖怪の時間感覚なんて人間と比べたらそんなもんだけどね、まるでこのタバコの煙のように。

「…」

じっとりとした視線を感じる。視線の主は私の姉、古明地さとりだ。なぜこんなに冷ややかな目で見られるのか、少し推察してみようじゃないか。彼女が仕事中であるにも関わらずその椅子に背中を預け寛いでいるから？それともそれに加えて有毒なガスを放出する乾燥植物を嗜んでいるから？はたまた昨日外から帰ってきて家の中を汚しまくったから？そんな考えが浮かんでは消えてを繰り返している。そう、このタバコの煙のようにね。

「……」

視線の温度が下がる。私の何が気に入らなかったのか、お姉ちゃんは露骨に嫌そうな顔をして机の上の書類に視線を戻した。そもそもニコチン中毒なのはあなたも同じでしょうに。1本吸う？

「いい」

何も言っていないのにピシャリと言い放つ。口を開こうとした私は遮られる形で空いた口をパクパクさせることしか出来なかった。なぜ分かったのかと聞いたところで無駄だ、どうせ家族の考えていることくらい云々と言われておしまいだから。お姉ちゃんが何を考えているか私にはわからない、このタバコの――。

「チッ」

ついに舌打ちが出た。理不尽極まりないハラスメント、これが家庭内暴力ってやつだろうか。

「あのね、全部口に出てるわよ」

「え、嘘？」

「嘘じゃないわよ、こいしの心は私には読めないんだから。当たり前でしょう？」
「やーん、恥ずかしい」
「ホントにね。何？その『タバコの煙のように』って」
「そこまで聞こえてたかー」
「全部ね」
　これは恥ずかしいところを見られてしまった、いや聞かれてしまった？どっちでもいいか。
「詩的じゃない？」
「私が指摘した時点でそうじゃないことに気づいて欲しいわね」
「えー？このフレーズの良さがわからないなんて、お姉ちゃんもまだまだだねぇ」
「私的には詩的なのね」
　やりおる。しかしＨＩＰＨＯＰ魂なら負けないのだ。ＹＯＹＯ私はどこだが生まれ幻想郷育ち友達はいない。
「やめなよ」
「悲しくなってきた」
　当然お姉ちゃんにも友達はいない。
「作らないだけよ。妖怪強度が下がるからね」
「そうなんだ。孤独な妖怪ほど強いんだね」
「そうよ。あなたには私たち地霊殿の家族がいればそれで十分なの」
「おっと洗脳教育」
　こういうのをヤンデレって言うんだね、くわばらくわばら。
「失礼ね」
「今度は口にしてないはずだけど」
「家族の考えていることくらいわかるわよ」
「お、いつものやつ」
「ではないわね」
　ではないらしい。